

205067-000-5

特65-981

繪本太閤記

近松 やなぎ/等著

M27

EDV-0066



繪本太功記

作



近松 千松  
近松 千松  
千葉 軒

天に命を授けしを討んといひしを我  
 未だ天命としらざるに諸軍を引  
 をしめし亂舞の音たかき内大臣春長公の一構へ遠近の諸士大半屬し  
 登城既櫓の齒を引とささも嚴重に見へにけり、取次の侍罷出  
 取次も聞ゆなく内大臣の法印只今參着仕ると申上ぐれば近習の面々斯と  
 言武智光秀諸共は様陳述く座に直る、久吉下部に打向ひ、嗣君に  
 もことのふお待かね、早く案内申せよと、いふ間程なく法印安部氏

繪本太功記

遠都の水清く、よごまぬ公家の交りに衣紋正しく入來る、春長莞爾と打笑給ひ、詞、法印には大儀、其方を召し寄せしは餘の儀にあらす、あれ成大庭の蘇鐵泉州妙國寺に有しを、此安土に植ゑ置く所に、頻りに聲を發し妙國寺へ歸らん、歸せくと震動する事三夜に及ぶ、正しく變化の所爲ならん判断いかにと有ければ、始終を聞入る内よりも理を考ゆる道々の、胸の筭木に眉をしはめ、詞、御尤成る御尋某考申せしに、草木心あしとは申せ共、佛地に育ち朝夕妙經を聞込み、一度枯し木あれども、元の如くさかへしも法花經の徳あらずや、法力の尊きは御宗旨の有がたき所なれば君にも御満足あらん、急ぎ佛地へ送りかへしたまはるが肝要ならんと法印が水を流せる辨舌は實晴明の末孫の器量顯はれ見へにける、血氣の大將道理にせまり、龜春長が手に入れし蘇鐵返すべきいはれあし暫らく妙國

寺へ預ける旨、使者を以て申遣し身が心に叶はざる法花の族いはれざる宗論を好み、上を恐れざる無禮の段々、牢獄へ押込置たり、其上今日捕へ置たる普天一人身が目通りへ引出せよ、龜安部氏には休足有て然るべからん、久吉には魚略なき様もてなすべし、はつと領掌式禮目禮、眞柴に隨ひ法印は次の一間へ立て行、程もあらせす下部共、普天坊を高手小手庭上に引すゆれば、光秀の普天に向ひ、詞、貴僧、かゝる警しめにあふ事も、法義故とは云ひながら、獄の苦しみ察しやる君にも是に御座ましますせばしつて出牢の御願ひ、致されてよからんと、普天をかばふ明智が詞、尾田殿くわつと怒の面、詞、某が詞も出さぬ内、出牢の願ひせよとは、いらざる汝かひいさの塗汰扣へて居よと居高丈、いねぐさり坊主よつく聞け、此度妙國寺の庭木の蘇鐵、某所望し此安土へ植置さたる所、むせうに妙國寺へ歸

らんとはゆる、餘りかしましきによつて、暫らく彼地に預ける間、佛木たり共春長所望の上は、再び返すにあらざ夫らを番人に申付る間、其旨急度心得られよと、冥途の高祖へ申達せよ不承知ならば直様に、普天を以て冥途より返答有べし、儕も法花の妙をしらば二度此土へ立歸り、某に詞をかはせよ、最早左様なる法力は有まい、一時も早く使を急がせよ、早く、くと不敵の春長、重悪つもの權威の仰こらへくし普天坊、すつと寄て齒がみをさし、詞をぬかしたり嘲つたり、汝が宗門で有ながら高祖をかるじ奉り、惡口雜言報ひ忽遠かるまじ、愚僧只今命を滅するも汝が使に行にあらす焰魔の廳へ赴儕が惡逆訴人の爲に此世を去る、見よく頓て火の車を持せ、拙者迎ひに来るべし、サ一時も早く冥途の門出急ぎたし、イ光秀殿介錯と誓る普天を光秀がはつたとにらみ、詞を我君に詞をかへ

し、惡言を吐手間で、なせ助命の願ひは致さぬ、恐ながら我君にも御怒りをしづめられ、御助命の程偏に願ひ奉る、元來勇猛盛んにして、良もすれば靈場佛地を破却したまふ事、君の一失山門の衆徒等も、急難を遁れんと一七日の加持祈禱惡逆の勇將と、世の人口黙止がたし、只仁惠の御計らひ偏へに願ひ奉つると、事を分けたる光秀が、詞に春長突立上りだまれ光秀、詞我惡逆とは憎き過言赦されずと拳振上明智が頭りうくく、打すへたまへど手向ひの、あらぬも主命はつと誤まり入たる無念の涙普天猶も怒りの顔色、詞、惡鬼魔王と云は汝が事、君有て臣、臣有て君たる事を知らず、情なくも大國の、主たる光秀殿を、童おとりうち打擲天罰佛罰一時に報ひ墮獄にくだしくれんすと、怒り重ねる額の天弓、光々として日運の、出現有りと、身もよだつ、ヤ物あいはせそ早くも國境へ引立よと

御下知恐れ家來共、はつと斗に引繩の、頓て恨をしらさんと題目の  
聲一心に、佛敵春長赦さじと詞は正に本能寺御法の庭に露となす、  
佛の報ひ宗門の威力の程こそ

○六月朔日の段

扱も其後天正十年六月上旬の事かどよ、内大臣平の春長、東北に猛  
威をふるひ押して都に上落有る、御嫡男城之助春忠二條の御所に居を  
しめ給ひ、天奏御沓を入給へば饗應の役人は武智日向守光秀、森の  
蘭丸初めとし、譜代の良臣古老の諸士列を正して相詰る御所の内勅  
浪花中納言兼冬仰出さる、は、龜往昔應仁の亂れより、諸國の逆賊  
王威を輕んじ、都の内へ軍馬を引入玉座近く馬蹄に穢し叡慮穩な  
らざりしに、幸春長大志をいだき、帝都を無事に治むる條、主上叡  
感淺からせ、其功を賞し給ひ嫡子城之助春忠を從三位に叙し左中將

に任せらる院の内勅、斯の通りと有ければ、春長はつと平伏有、有  
がたき勅命、詞不肖の某、なんぞ一臂の方に及ばん、三好を初め逆  
徒原、四方に退散いたせしも君の聖徳數ならぬ悴春忠身に餘つたる  
官位昇進、天恩謝するに詞なしと、勅答有れば兼冬卿や、満足の御  
氣色、春長重ねて軍務に暇なき某、心斗の御饗應、鄙びたる觀世能  
御上覽も時の興、イ、奥殿へと有ければ袖かさ合せ兼冬卿、武智が案  
内にしづく、と奥の間さして入給ふ、春長跡を見送つて、蘭丸是  
へと近く召れ、詞汝も兼て知る通り、無二の忠士と思ひの外、心得  
がたき光秀が心中、彼が心を探らん爲、いつぞや寺において諸侯の  
見る前、恥辱をあたへ恥しむれど面に怒りを顯はさず、無念を忍ぶ  
彼が胸中、猶以て不審の一つ、其儘にさし置ば、虎の子を飼に同じ  
逆心の企有や虚實を探りためし見よと、仰に蘭丸さんい、詞武智

が行跡聊不審に存る折から、割符を合す君の御心思ひ合する彼が俗  
 性頭上に喜怒骨有者は主人にたゝると異人の禁め、もし逆心に極ま  
 らば、討て捨んに手間隙入らず、奥へ踏込引とらへヤレ、危忽也蘭丸、  
 實否も糺さずあら立あば、返つてひが事出来せん、事によそへて、  
 合點か、ウテ、畏り奉る、必油断いたすあど、示し合して春長公、帳臺  
 深く入給ふ、蘭丸は只一人、両手をくんで思案顔、工夫をこらす折  
 も折奥は、亂舞の打囃子、二番三番ワキ能も、終りと見へて配膳の  
 時刻も移る、已の上刻、武智が一子重次郎、古實を守る饗應司、配膳  
 のかけ盤山海の珍味美をつくし、目八分に捧げ来る、蘭丸見るより  
 蘭丸、兩人立合申合せも有べきを、自分一人の取計らひ、此蘭丸は  
 香込の膳部の次第は、いかゞでござる、御料理は板元奉行中井半

左衛門七五三の猷立ニ七五三、何にもせよ、相役の某に一應の  
 こたへもなく、氣儘成るいたし方近頃以て不躰千万、此分では差置  
 れず、光秀殿へ直應對、役所へとかけ行向ふ、襖ぐわらりと出来  
 る武智、蘭丸傍へぐつと詰寄、鬮様子残らず、聞れしを、武士は禮  
 義を表にするに、此蘭丸を踏付し仕方、いか成趣意か言へ聞ん、返  
 答次第手は見せぬときつば廻せば、ハ、ハ、仰々しや蘭丸道若氣の一徹  
 何故貴殿を侮り申さん、最早御膳の時刻故、役目大事と勤る光秀、  
 たまり召され、饗應の役、貴殿拙者に相勤めよとは主人の云付、主  
 命をもどき、自分の氣儘にせらるゝは、聞へた、こりや何か、拙者  
 を役に立すと思し召すか、但し又た智惠者と呼れし武智殿、人を見  
 下す高慢か、イヤ、人にも知たる其元の素性、何か浪人のよるべなく、  
 所方とをうるたへ廻り、北國において詮方なく、糎に盡たる身の

せつあさ、土民どもの小悴を集め、手跡指南の禮物で、命をつまぐ寺子やのお匠師様、うままだ有、日外、江州佐々木征伐の折から、此下と先手を争ひ、箕作和田山時限の合戦、久吉に仕負ても、耻を耻共思はぬ其元、何と、そふではござらぬかと心に思はぬ傍若無人、さしもの光秀くわとせき上、詞や物に狂ふか蘭丸、大切の場所と事を慎み、云せて置けば法外千萬、今一言云つて見よ、舌の根を切下んずならば手柄に切て見よ、切て見せよ、くど兩方が互に詰寄詰より、既に斯よと見へたる所、襖わらはに春長飛かゝつて光秀か、襟がみつかんでどうと捻付、詞やをれ光秀凡武家の格式は、古實を以て式法を用る、過たるは猶及ばざるにしかじとは、古人の詞、院の内使も重けれど、皆それくの例法あり中納言殿饗應の膳部、金銀の瓶器を用ひ、七寶を芥のごとくちりばめ、法外奔走此後、主上仙

洞の行幸には、何を以てか饗應に叶はんや、其上蘭丸が申は我詞も同然なるに、異變致す慮外者、頬ぶて蘭丸、早くぶて、早く御上意なりと蘭丸が腰の鐵扇振上て、眉間眞向續打、くい入要に血は瀧津瀬、是はどかけ寄重次郎膝にかためて引敷光秀、流るゝ血汐諸共に眼血走る、無念の顔色春長、つくづく打守り、詞いかに光秀、今蘭丸が手を以て春長が折檻、口惜ふは思はぬかと、底意を探る大將の、詞に光秀居直つて、詞、仰共覺へず數ならぬ共武智光秀、君に捧げし我命、骨はひしがれ身はずたくに成迎も、大恩有御主人をお恨申さん様はなし、左は去ちがら世の人口、春長こそ鬼の再來、情をしらぬ大將と譏りを残したまはん事、末代迄の家の瑕瑾舊惡を憎む御性質、諸士の恨は小車のついに御身に報ふといふ、御心の付ざるは、淺ましや悲しやな御心をひるがへされ道仁義の大將と、呼

れ給はれ我君と、或は怒り、或は歎き、五臓をしぼる、血の涙、思ひに千々に重次郎父の心を察しやり、齒をくいしばる忍び泣心と思ひやられたり、金言耳に逆立つ大將、猶も怒りの聲あらく、詞、トいはれぬ諫言、推參至極、目通り叶はぬ立てうせう、とく蘭丸武智光秀親子の者、門外へ引出させ、早くくと烈しき下知、はつと、領掌蘭丸が猶豫はいかにときめ付られ、無念重なる光秀が、我子を引立出て行、底意は誰かしら浪の、萬里に羽打つ大鵬や面目涙重次郎身はしよげ鳥の片羽がい、父の心はしらにぎて、神も佛もなき世かと、身をかこちたる忍び音の、胸はくら闇五月やみ、詮方涙諸共に御門の外へと出て行、名にしおふ、花の都を隣して、時に近江の本城を跡に見あして今爰に、假の舎りの上屋敷千本通りに一構へ、日向守光秀が出仕の留主は操の方、夫子の武運長久を、神に祈をか

けまくも、手づから備ふる神酒供物殊勝に見へて爪はづれ、遺は武家の奥床し、折から次の襖を開らき、出来る武士は武智が組下九野豊後守、年々五十の分別盛り、操が前に両手を突き、詞先以て今日は、林鐘の初日、大内にて氷室の節會、殊更太守光秀公大公義より饗應司の大役仰付られ、御家の眉目我々迄大慶至極、と述べれば操の方取敢あへず、詞夫光秀重次郎諸共未明よりの御登城、殊に大事はけふのお役目、常に短氣の春長様、生れ付た夫の一徹、何の障りもない様と案じるは女の常、悲しい時の神佛と手づからのお備へ物、詞是はく、イヤもふ萬事抜目なき光秀公、追つ付け吉左右上首尾と挨拶取くる所へ、殿様の御下城と、しらせの聲に妻操我子の乙壽諸共に豊後守も座を改め、待間程なく武智日向守光秀、常にかはりし其面色、曇ざはりも荒しく、不興の体に立歸れば、跡に隨



ひ重次郎、しほくとして座に直る、夫の顔色額の疵、心ならずと操の方、光秀の傍近く申我夫、闘いつにないお顔持、お氣もじ悪ふはござりませぬかお怪我でもなされたか、どうやら氣かゝり胸騒ぎ心かゝりと尋ねれどかふいらへもせぬ夫重次郎顔ふり上、闘今日二條の館にて饗應司を勤むる所、日頃不和なる森の蘭丸、我々へ様々の悪口雑言それのみならず春長様、以ての外の御怒りにて、蘭丸に仰付けられ、おの通り、父上の眉間へ疵の付程に、殿中でのうち打擲目通りへは叶はぬと、警固の武士に追立られ、無念ながらもおめくこと、顔押し拭ひ歸りしと、云ひくこばす口惜涙、聞より妻は、はつと、胸をつらぬく釘鎚豊後も俱に拳を握り咬牙齒さしみ無念の涙、様子立聞四方天、ものをも云す表の方、かけ出す裾をしつかと留、闘事をせいたる汝が顔色、子細ぞあらんといはせも立す愚

なり豊後守主人へ耻辱をあたへし素丁稚の蘭丸め素頭引拔立歸る、妨げするあとふりはどき行んとするを猶も引き留、闘、其憤りは、兪忽く、汝が不骨は主人の誤り、返つてお家の仇とあらん、先つ待たれよとさ、ゆる九野、面倒など勇氣の田島、放せ放さぬ二人が争ひ、光秀聲かけ、待て兩人、闘身が詞も出さぬ内立騒いで見々るしいしづまれやつとせいすれば、物にこらへぬ田島の頭、武智が前にぐつと詰かけ、闘縦誤り有るにもせよ、丹州近江兩國の太守、殿中での打擲は、我々も俱に耻辱、頬耻をさらさんより、蘭丸めを打て捨、叶はぬ時は生害と覺悟極めし四方天、な、あせお留ささる、な、愚く光秀を打たるは私ならぬ主命、蘭丸に遺恨はない、元來短慮の御大將、心に叶へは飽迄寵愛、又叶はぬばうち打擲、縦命を召さる、共、君に捧げし我一命、ちつ共惜まずいとはぬ某、我

存念もしらすして息筋はつて尾籠のふる舞、しづまれすされとねめ  
 付る、道理に道荒者が、行も行かれず立たり居たり勇氣も、たゆみ  
 猶豫ふ内、詞御上使の御入と下部が聲、光秀不審の眉を皺め、詞へ  
 心得ず思ひかけなき上使とは何にもせよ、女房悴は次へ立、早く  
 と追立やり、威儀繕ふて出迎ふ案内につれてのつさく、役目を功  
 に肩肘はり、頬も眞赤赤山與三兵衛上座よ、ひんすと押直り、詞上  
 意の趣餘の義に有ず、先達て眞柴久吉、郡三家を退治の爲中國へ馳  
 向ふ、急ぎ光秀加勢として、西國へ下り久吉の幕下に屬し、戦功を  
 勵むべし、其功勞によつて、出雲石見の兩國給はるべき間、今迄下  
 し給はる丹州近江二ヶ國は召上らる旨、城代へ申渡し急ぎ城を明  
 渡すべしとの嚴命也といふに人々二度悔り、主従顔を見合せて暫し  
 詞も口籠る物に動せぬ光秀の禮義正しく上使に向ひ、詞へ、台命の趣

委細承知仕る直様是より西國下向、城明け渡し用の意萬端、家中の  
 諸士へも申渡さん、早速の領掌神妙く、一刻の延引は一刻の不  
 忠となる、出陣やら宿がへやらがらくた道具片付て、早く城を渡  
 し召れ、役目は是迄おさらばと、にくてい目禮取ませて、眞綿に針  
 の青疊、蹴立てこそは立歸る、一徹短慮の田島の頭、詞へ御主人、  
 今赤山が上意の次第、前後揃はぬ詞の端く、西國加勢と披露して  
 實は御身を改易し、自滅をさせんず春長が姦計、良禽は木を見て栖  
 不仁非道の尾田春長、義理も忠義も是限り、西伯姬昌は殷を討ち、  
 ついに天下を治めし例、破鏡再び照さぬ道理、今目前に顯はれたり  
 今隨臣の空虚をかながへ、一時に尾田を討亡し、天下に覇たる功を  
 上、名を千歳にとめんは、いかにとせき立田島、や、默然  
 たる日向守、始終こなたに立聞操、襖あらはに走り出、夫の傍へさ

し寄て忠義一途の田島の頭、さらく無理とは思はねど、勿躰ない  
 我君を殺して四海を奪ふとは聞もうるさい穢らはしい、罪ハ目前美  
 濃尾張主を殺して一日も、安穩ならぬ天の責ね年寄れし母御様、い  
 とし可愛子供迄俱に悪名とらするが、それが本意か情ない妻子不便  
 と思すから、御身全ふ月と日の、くもらぬ鏡武士の、探を立て給は  
 れど、わつ、くどいつ理をせめて夫を思ふ貞心の思ひは千筋百筋の  
 苧総を亂す憂涙、といめかねてぞ見へにける、元來仁義の豊後守、  
 光秀に打向ひ、詞文武二道の我君にお諫め申すは憚りなれ共、和漢  
 の書籍に記せし通り、叛逆謀反の輩が本意を達せし例しはあし、世に  
 秀たる光秀公高木風の俗語にひとしく、皆佞人のなす所、時節を待  
 て誤りなき申開きの手段はさまく、上使に立し赤山と君が五音を  
 考ふるに水火既濟の卦に當つて、西施國を傾くる不吉の占、一旦勝

利有といへ共日ならずして災生じ終に全からざる前表只幾重にも思  
 ひどいより下されよと、事を分けたる諫の詞、いへ共どかくの返答  
 なく、詞、心なき人は何ともいはいへ、身をもれしまじ名をもお  
 します、スリヤいよく御謀叛の思し立でござるよあと、いはせもあへ  
 ず豊後か首討てかたむる、謀反の首途、詞、適く、此上は軍の手配  
 さいで出陣の用意をせよ、ハ所存の程こそ

○同二日の段

詞何と三助暑くてこたへられぬぢやあいかい、此下郎には何が成  
 る、朝どくから手桶の切り水、くれ方も又此様に汗水に成てのはき  
 掃除、おらも後の世には大將に生れてくべいと思ふが、ごふであら  
 うなあ、されば此本能寺を假殿にしてござる春長様は、前生は鬼だ  
 と云バ、奴が大將にならぬ事も有まいはさど、いへバ傍から珍内が

圖ハテ扱二人あがら何をいふぞい、死での先は片便、奴から大將に生  
 ながらなられた真柴殿、うれを知りつゝ、ほんにやれく來芝の事  
 は由男にして、山村程今をため、里虹者じやといはるゝ市紅が肝心だ  
 と、とつと笑ひの折ころわれ、ア、ア、あれに見ゆる御先供、なむ三春  
 忠様の御入だと猫に鼠と奴共、おのが部屋へと逃て入、程なく近付  
 く鉦乗物、數多の武士が前後をかこい、築地御門に昇すゆれば、か  
 くとしらせに森の蘭丸、禮義正しく出向ひ、詞阿野の御局御苦勞に  
 存じ奉ると、詞の内に乗物の戸を開かせて阿野の局、三法師君を抱  
 まいらせ、しづくくと立出、春忠様の御名代と此君の御入故、祖父  
 君春長公より御迎ひとして、自がもりまして参りしに、殊のふ御さげ  
 んもよろしく、お嬉しう存じますとのたまひければ、詞、それは  
 一段さぞ祖父君にもお待かね、いざとせ給へと蘭丸が、案内につれ

○六月二日の段

圖何と三助暑くてこたへられぬぢやあいかい、此下郎には何が成  
 る、朝とくから手桶の切り水、くれ方も又此様に汗水に成てのはき  
 掃除、おらも後の世には大將に生れてくべいと思ふが、どふであら  
 うなあ、されば此本能寺を假殿にしてござる春長様は、前生は鬼だ  
 と云バ、奴が大將にならぬ事も有まいはさと、いへば傍から珍内が  
 詞ハテ扱二人あがら何をいふぞい、死での先は片便、奴から大將に生  
 ながらなられた真柴殿、うれを知りつゝ、ほんにやれく來芝の事  
 は由男にして、山村程今をため、里虹者じやといはるゝ市紅が肝心だ  
 と、とつと笑ひの折ころわれ、ア、ア、あれに見ゆる御先供、なむ三春

忠様の御入だと猫に鼠と奴共、おのが部屋へと逃て入、程なく近付く  
 鉄乗物、數多の武士が前後をかこり、築地御門に昇すゆれば、か  
 くとしらせに森の蘭丸、禮義正しく出向ひ、詞阿野の御局御苦勞に  
 存じ奉ると、詞の内に乗物の戸を開かせて阿野の局、三法師君を抱  
 まいらせ、しづくと立出、春忠様の御名代と此君の御入故、祖父  
 君春長公より御迎ひとして、自かもりまして参りしに、殊のふ御さげ  
 んもよろしく、お嬉しう存じまするとのたまひければ、詞、それは  
 一段さを祖父君にもお待かね、いざさせ給へと蘭丸が、案内につれ  
 て付とも門内さして入にけり、鹿の音むしの音もかれくの契り、  
 あらよしなや、形見の扇よりく、猶うら表有物は、人心なりける  
 ぞや、あふぎとは空言やあはでぞこひはそふ物をく、詞局が一曲  
 出来た、倅春忠が名代孫殿へ御馳走に、何と面白いか、つげ

くと大盃、はつと心得しのぶがお酌、詞蘭丸へさす所なれ共、阿野  
 の局が舞の一手勞を謝する其爲に局へ盃さし申す是はくふつ、か  
 なる一と奏御意に叶ふて此上もなき身の冥加といひつ、局は御盃、  
 少し引受差置ば、春長公笑壺に入、詞、蘭丸局が間を仕れと重き御  
 誑も諂まぐ、詞仰に候へ共一滴も及ばぬ某、此義は偏に御高免を、ハ  
 扱呑ぬ所を吞すが興、肴は汝が望次第、すりや御肴を下されふとな、  
 \*六十餘州を手握る此春長、何なり共望めく、然らば何と不  
 此蘭丸に軍勢を四五千斗下し給はらば有がたからんと相述べ、  
 心得ぬ汝が望もし軍勢をあたへなば、さん候丹州龜山へ押寄、只一  
 戦に光秀が首討取て君の災をさけ申さん、成程尤なる願ひなれ共、  
 いらざる心配無用く、左様な事に骨折ぞと、早く一盃を傾けて、  
 暑を凌ぐが身の養生飛立斗り有明の、よる晝となき樂しみの、詞築花

にも榮耀にも、此春長には及ばぬ、我君の御詮には候へ共、安  
 土の無念を散さんと一度は謀叛の旗を上、窮鼠返つて御身の大事、  
 道は若氣、北國には柴田勝家西國には真柴久吉、龍に翼の尾田春長、  
 君の御詮は、去事ながら蘭丸殿の詞の如く油断大敵、ハテ局迄が同じ  
 様にいらざる此場の長詮議、御客人が無ふらく眠り、身もはつと退  
 屈、一睡の夢の間の契りはいさど戯れて、座を立給へば阿の局若  
 君誘ひしづくと帳臺、深く入給ふ、跡にうつとり蘭丸が、心一つに  
 とつ置つ、思ひは同じ女氣の人目しのぶが寄り添て、詞申蘭丸様、も  
 ふ何時でござりませふ、これはしのお殿もまじはまた奥へ行かず、  
 アイ、扱うれば不埒千万、御用もあらん早奥へと、いふ顔じつと、打  
 詠、詞はんにまわ女の心と男とはそれ程迄違ふものか、兄齋藤藏之  
 助殿にお頼申て、春長様の奥勤も、あなたのお傍に居たいばかり

今更いふも恥かしながら、去年の初春洛東の、地主の、お庭の花盛  
 り婢共に誘はれ願ひかけまく初戀の、色も香も有殿御ぶり、観音様  
 のお仲立、互の胸の下帯も、どけて嬉しい新枕かはるまいぞのお詞  
 が直ぐに心の誓紙ごと、片時忘れぬ女房がお傍に居るがおいやなら  
 いつを手にかかけ給はれと、ぴんとすね木の糸櫻、花も亂る、風情也、  
 さしもに猛き蘭丸も心の外の曲者に、取ひしがれて背撫さすり、詞  
 アイもふ何事なふ申せしがお氣にさはらば眞平く、百万の強敵にも  
 びくともせぬ某が、斯の通りと手をつけば詞、又人をじゆつながら  
 すのかいな、春長様も大方に、班女が閨のお睦言、お局様の取楯で出  
 船の相伴、ござんせと手を取れば、詞、扱たしなみや、人目を忍ぶ  
 二人が中、殊に今宵は君の宿直又の首尾をとふり切を無理に引立奥  
 の間へ入やいるさの月かげに、しのぶの亂れ、亂れあふわりなき夢

や結ぶらん、早更渡る、夏の夜の、そよ吹く風も物すどく、寐られぬ儘に御大將、手づから障子押ひらき、何心なく茂みの方見やりたまへばさはく驚きさはく時鳥、飼ハテいぶかしや、まだ明やらぬ夏の夜に、庭木をはなれ騒ぐむら鳥、合點行じとさつと目を付、あやしみたまふ時しもあれ、遠音にひやく鐘太鼓、春長つゝ立耳ろば立、飼アレ次第に近付人馬の物音、宿直の者はあらざるか、急ぎ物見を仕れと、仰の下より阿野の局長刀かい込走り出、飼君の大事に候ぞや、蘭丸殿は何所に有早く物見を致されよ、わらはも俱ほと表の方、呼はりくかけり行聞に蘭丸一間より、飛で出れば春長聲かけく蘭丸、反逆有と覺へたり、急ぎ物見を仕れと、上意にはつと蘭丸は振返り見る廊下の高欄、是幸の物見ぞといふより早くかけ上り、四方を急度打見やり、物のあいろはわからぬと、此本能寺を心ざ

し押寄るは、察する所武智光秀、スリヤ光秀が反逆とな今ころ後悔汝が、諫、聞入ざるも傾く運命、只此上は防ぎの用意、委細承知仕る、が縦一致に防ぐとも院内わづか三百餘人、思へばく主君と俱に、蘭丸我君様、口惜やと主従が怒りの齒がみ逆立髪、無念涙の折からに、表の方より森の力丸、廣庭に大息つぎ、飼御油断有な兄者人、武智光秀我君に、多年の恨を散せんと、手勢すぐつて四千餘騎、左馬五郎を始とし、或は齋藤藏之助築地間近く押寄せて候と、いふ間もあらず蘭丸は、其儘ひらりと、飛おりて、飼我君には恐れながら防ぎ矢の御用意有て然るべし、某がかしこに向ひ、一當あて、眠りを覺さん、力丸來れと兄弟は飛がごとくにかけり行跡打見やり春長公、此上は防ぎの一矢、先差當つて一大事は三法師、飼宗祇、若をいざなひ早く、御謎の下にかひくしく、しのぶ諸共茶道

の宗祇、若君いだき参らせて足もわな／＼胴ふるひ、しのぶも俱に  
うろ付所へ、多勢を切抜阿野の局、其身は數ヶ所の痛手ながら、血  
に染長刀かい込で心も強に立戻り、詞申／＼我君様、最早敵は込入  
て候へば、君に替つて一と軍御身を遁れ下さるべしと、口にはいへ  
ど御名殘、涙彌増斗也、詞イヤ愚か／＼あまゝか身を遁れんと返つて  
名もなきやつ原に、首を渡さば死後の耻辱、汝は我に成りかはり宗  
祇引連れ三法師を何と守護し落延びて、此旗諸共久吉が手に渡し、  
我存念を晴させよ、猶豫は返つて不忠の至りと、仰にわつと泣くつ  
おれ、假令不忠に成とても、君の御最期よそにあり、何と此儘落ら  
れふ、此義はお赦し下さりませ、是を思へば自らが、宵の酒宴の其  
時に斑女が閨のかこち言、其一さしのあふぎとは、別れを告るしら  
せかと思ひ廻せばいと、猶、悲しいわいのとさふと伏歎沈めばお道

理と心をぐんで諸袖をしぼるしのぶが俱涙、泣音をそめる斗也、數  
多の切首片手に引さげ庭先へ、立歸つたる森の蘭丸、それを見るよ  
り春長公、詞、今に始ぬ汝が働、シテ様子はいかにく、されば候、  
二條の御所へは武智光安立向ひ當手の寄せ手は左馬五郎光俊、采配  
取てさびしき下知、なれ共、味方は必死の勇者、御覽のこどく首討  
取、一泡吹せ候へ共、始終の勝利は、成程／＼、只此上は深く、死  
出三途も主従俱に、今聞通り我覺悟、早く此場を落延ぬか、但し  
三世の縁切ふや、其義はなア縁切が悲しくば、一時も早く落延よ  
お局君の先途を見届くるは此蘭丸、片時も急ぎ裏門より、宗祇坊は何  
をうつかり、テット合點、イヤもふ最前から落たふて／＼氣は上つり、コレ  
しのお殿もお供の用意といへど道に忍び夫、言たい事も面伏せしは  
れ、泣／＼立上れば、蘭丸聲かけ、詞しのぶは君の御供叶はぬと聞



て悔り驚くしのぶ、詞、ろりや何故、汝にお答なけれ共、そちが  
 兄齋藤藏之助光秀に一味の反逆、敵の末は根を断て葉を枯す、命を  
 助け其儘歸すは是迄、是迄君への宮仕と明て云はねと妹と春の、中  
 を隔の垣となる、しのぶが憂身詮方も、涙ながらに用意の懐劍、咽  
 にかばと突立れば、何故と驚く人々大將春長感じ給ひ、女赤が  
 らも適の生害、兄とひとつでない潔白、今日只今春長が仲人し蘭丸  
 が宿の妻、心残さず成佛せよと、仰に手負蘭丸も、はつと斗に有が  
 た涙顔に紅葉のからくれあい血汐に染る両の手を合すも二世の名残  
 ぞと物いひなげに夫の方、御大將をふし拜み、笑顔を娑婆の置き土  
 産、あへなく息はたへにけり、歎をよそに御大將、勇を付んと、  
 蘭丸、詞我は是にて討手を引受、此場を去らば討死せん、汝は是より  
 馳向ひ、敵のやつ原一泡吹せ、名を萬天に輝かせよと勇め給へば、

詞、ハ、仰にや及ぶべき、たとへ光秀、何万騎にて寄する共、片はし  
 なで切まくり立、君の御供仕らん早おさらばと立上れば、涙を拭  
 ひ宗祇坊、扇をいさめす、ひれば、是非も涙に袖の浪、たゞよひ、  
 ながら若君を、宗祇が背にしつかりと、是ぞあふぎの憂別れ見かへ  
 る名残、見送る名残、又立戻るを蘭丸が、中を隔つる鯨波、早亂れ  
 入る諸軍勢切立なき立女武者、其名も、高くな書の、筆にとゞめ  
 て末の世の美談と、ころは成にける、寺中は合戦真最中、力丸蘭丸  
 一同に一進一退離散して、或の討れ或は討ち、つゞくあらても有ら  
 ばこそ堅甲利兵の大軍を防ぎ戦ひ流る、汗と湧出る血汐、から紅い  
 に水くゝる瀧田の川に楓葉の落て流る、如くあり寄せ手の從將安田  
 作兵衛、春長を討取らんと、塀際にさし寄れど、味方の勢に隔られ  
 たやすく内へ寄付かれず、得たりと鎗を力杖、ゑいと一はね高塚に、

飛上りたる早業さそく目ざましかりける「次第なり、さしも名高き  
 靈場も修羅の巷と鳴る鐘の、天地にひしく陣太鼓亂調に打立く、  
 先にすゝみし田島の頭手勢引具し一同におめき叫んで攻かくれば、  
 春長公一越調、詞反逆光秀はいづくに有る主に背く天罰思ひしらせ  
 てくれんすと、弓杖ついで罵る大音、さしも勇有武智勢、恐れて思  
 はず進かねたぢろく隙にさし詰引詰、射給ふ矢先に先手の軍兵、は  
 たくくんと射たをされ、あだ矢はさらになかりける、此虚に乗て  
 坊丸力丸、鎗をひねつて八方へ突立なき立阿修羅の如く廣庭、さし  
 て「追て行、客殿には春長主従、膝をならべてどつかと座し、力丸無  
 念の齒がみをなし、詞、口惜や往昔天文年中より、今天正十年迄、四  
 海の内に横行して、武威を以て天下の兵亂を切しづめ、民を塗炭の  
 中にすくひ、四方の敵國君の英名を、鬼神の如く恐れふるひ、正二

位右大臣に昇進し、大業既に成就せしに逆臣惟任が爲に空しくなら  
 せ給ふとは、天魔の所爲か口惜やと、血汐にそゝぐ、血の涙といめ  
 かねたる斗也、春長一言の詞もあく、御はかせを脇腹へ、がばと突  
 立引廻す、俱に冥途の御供と力丸坊丸殉死の切腹むさんといふも餘  
 り有御身の果ぞ「あはれなり

# 繪本太功記

○六月三日の段

董卓は漢室を焼捨伯知は水を以て趙をひたす、例を爰に眞柴が軍師  
名に高松の城廓も水死の合戦強勇も手に汗、握る斗也、武家の家で  
も姦き婢共は寄こぞり、詞何とあげは、毎日くふる雨で水の増るが  
癩の種、是と云も尾田勢の皆仕業、中でも憎いは眞柴とやら松葉と  
やら、突さがしてやりたいわいのふ、其突次手においたはし  
いは、妹御の玉露様、浦邊山三郎様にさつゝい惚様、大方埒の明く時分  
に成て、山三郎様の爺御空之進様、林丈左衛門めにお討れあされ  
た故、此程はふらくと戀病ひ、さうかいのふ、こちらも覺の有  
る事、どふぞ首尾して上ましたいと、道やさしき女の情、打連一間

へ入にける、思ひ内に有れば、其色眼中にすゝむとかや、父の最期に  
 亂れ髪、無念の仇を角額、浦邊山三郎利氏は、主の、留主を窺ふて  
 林を一太刀恨んど、屋敷へ入込生死の境、斯と白齒の、玉露が、出  
 合頭に見合す顔、はつと驚き引返す、袂にすがりて待てたべ浦邊様  
 詞お前は深いお望が、有つてのお越と、見たは違はぬ形かたち、其  
 れ姿に戀こがれ、送くる千束の返事さへ、ないはつれないお心ぞ、  
 せめて一夜の添臥を、赦してたべと取付いて、じつと、しめたる手  
 の内に心、餘りて見へにける、こゝく詞聲が高い、推量の上は包むに  
 及ばず、かくまい置かるゝ敵丈左衛門、何卒今日中に手引して、勝  
 負をどげさせ下さらば、こあたの心もむそくにせじ、何と、せい  
 たる面色、玉露も胸をすへ、詞成程く私しが爲には舅御の敵打を  
 見合せ、垣越に御案内申まじよ、其詞に違ひなくば、まだ云聞す

子細も有、こなたの部屋へ、ろんちらかうと手を取て、顔は上氣に  
 散花の、玉露姫は晴の霧、濡にかしこへ入にける、折もこそ有れ立  
 歸る、館の主清水長左衛門宗治智勇を兼し其骨柄、跡に従ふ、女房  
 のまだ、十九二十二つ三つ、雪の白粉やり梅が紅花色をふ、縁子を  
 いだきいたはり立歸る、宗治は眉をしばめ、ヤイやり梅晩春の末より  
 三家へ人質、倅諸共遣はせし所、いまだ合戦の勝利も決せず、敵にか  
 こまれたる此城中に歸されしは子細が有ふ、何とく、ハア、尤のお尋、  
 此度三家御加勢に向ひ給ふといへ共、手を空しくして日を送り、水  
 の手一つ切事叶はず無念さは夫迎も同じ事もし討死致されては大事  
 と成、手立を以て一時の合戦は遠からじ、それ迄は英氣を養ひ置る  
 様、うさぎを晴すは、此若、随分くやり梅も、心を付よとはげしき  
 御殿、此子の顔も見せたま、見たさどるくばに愛持つやり梅が色ぞ

籠て見へにける、義にはり詰し宗治は、指折て日をかぞへけふは早六月三日阜月の末より敵方に大變有凶星を見極め置つるに、土俵を突上優長なる仕かた、間者を以て敵方の様子、聞出さんと思へ共、是るといふ謀なく、空しく入水する時は後諸人の物笑ひ降参するは家名の耻辱是迄度々の合戦に不覺を取ぬ宗治が、猿冠者如きの計略、斯口惜き籠城も天より我を責給ふか、何とせんかとせんと名に秀たる武士も、傾く運と突息も天を睨んで、ゐたりける、あはたしく庭先へ士卒一人かけ來り詞何か談する筋有と郡家よりの使として、安徳寺和尚只今本陣へ参着せり、殿にも早く御越と云捨家來は引かへす、詞、汝が歸城の上安徳寺の使の様子聞捨がたし、是より諸士に對面致し、事の子細を申聞ん、其方は郡より預り有丈左衛門四人同前あれば萬事心を付よ、行けく心得ましたと立上り與と、表へ引別れ

二の丸さして出て行、雨吹拂ふ松風の、夏山とめし、虫の音をゑるべに、漂ふうらづたひ振も、小づまもかいしく、夫を道びく健氣の玉露、花も木草も落花狼藉、互に切合ふ穂先とはさき汗にひたする斗也、いらつて切り込太刀先を、しつかと請留丈左衛門、詞ヤア小賢しい浦邊山三、儂が親の空之進、評議の席にて某に悪口吐し入耳虫、討て捨たを恨に思ひ、刃向ひ立は及ばぬ事、ヤアぬかしたり丈左衛門、左いふ儂は、冠山の落城をよそに見て、當城に逃込し人畜生、父の怨旁の恨、思ひしれよと劔かへす刃尖き双方が請つ流しつ烈しき争ひ、見る玉露は心も空山三が念力通じけん林は刀打落され、逃んとするを切ふせく、父の敵覺へよと、のつか、つてどめめの刀、首引切つて大地に打付、詞、嬉しやく、玉露殿禮は未來でおさらばと、腹かさ切らんとする所、戻りか、りし長左衛門、や

り梅諸共走り出、鬮ヲ死るとはうろたへ者赦しもなき敵を討し言譯の切腹あらば、某が計らひを用ひ、まさかの時の討死ころ武士の道城外の水をくぐり、久吉の陣所へ馳込、偽りならざる次第を頼み、かくまひもらふが術の第一、敵の空虚變の次第、相圖を以て知されよ、折も有ば眞柴を討取、名を末代に残されよ、サ、一時も早くしどせき立清水、ハア、有がたし、武士の數にも入べき大功、命を的に仕負せて立歸らんと驅出す、ヤレ山三様御待なされ玉露様とのわりなき中、最前ちらりと、イヤ申宗治様、御妹御と浦邊様どの二世の御縁、すき合た二人が中、門出を祝する、扇も時の島臺土器、松は元來常盤木の、繪にはあらざる松竹梅、末廣びろと夫婦のかため、鬮ハア、重くの御惠、玉露殿も随分無事で、御前も御怪我のない様にと、立派にいへどなま中に、馴れし枕のもつれ髪はなれ、がたなき兩人を

わざとせいする宗治夫婦、扇屏風やあふぎの別れ、心定めて城外へ飛が如くにかけり行、囊沙背水の謀を廻らし、見ぬ唐土の元帥も舌を巻べき奇代の軍術、水かさ増る大河の流せきとゆめたる土俵岩石大木運ぶ地車の、木やり音頭もちんば馬、揃はぬ肩も降参の、すき腹武士とえられける、加藤は土手の高みに上り、鬮ハア者共汝等はことごとく降参の者共成に此度の勤功、大將始某迄満足せり、此合戦終りなば、急度御扶持有べきぞよ、ソレ兵糧を遣ひ終らば、暫時は休足致すべしと、下知を傳ふる其内に向ふに何か騒ぎし人聲、正清きつと打詠め、鬮ハア合點の行ぬ、高松の城外にわやしき取合、何にもせよ心得ずと瞬もせず見渡す向ふに、我組留んど數多の軍兵、小船に打乗、右往左往に追廻せば、山三郎は水中をくぐりつつ、抜つ働けば、鶉よりも早き水練水魚、ろこよ爰よと組子共、うる付中に、舳

先を持、ゑいやうんと打返せば水はまんく小船の組子浪のもくせ  
と成りにける、此有様に残りの兵船、進みかねて予見へにけりこな  
たの岸には正清が、何者成ふ心得ずと、手ぐすね引て待所へ、血氣  
の浦邊は抜手を切、忠孝二つを顔に當て、飛鳥の如く遙の堤一聲諸  
共飛上れば、何者成るぞと取巻雑兵目もかけず、加藤が前に両手を  
突、詞某は郡家の家臣浦邊山二郎利氏と申者、高松の城内において、  
親の敵を討取、立退んとせし所、城中より討手かゝり手詰の難義何  
とぞ武士のお情に、御かくまい下さらば生々世々の御厚恩と、敬ひ  
入てぞ願ひける、加藤正清聲をあらげ、紛らは敷願ひの筋誠親の  
敵を討は武門の譽と、郡家より恩賞も有べき筈返つて搦捕んとする  
高松勢、紛らは敷御邊の偽り、真直に申されよと、疑ふ詞に、詞、ハ  
御尤成御仰、某が討取し親の敵と申は、冠の城を拔出し、林丈左衛門

と申者、我父奎之進と聊の論により、父を欺し討に討たる奴其無  
念止事を得せ何とぞ怨を報せんと主人へ敵討を願へ共、軍中とて取  
あへなく、剩へ敵丈左衛門は清水宗治殿に預けと成ば心に任せず  
空しく月日を送る内、此度の合戦に付、久吉公の計略にて、一城諸  
共兎の如く、水底のもくずとならんは必定、然ら父の鬱憤を散せん  
時節なしと、透を窺ひ本望は達したれ共、御赦しなき敵討、いか成  
咎有んも知ず惜むべき命にはあらね共、亡兩親の跡をもいとあみ、  
其上にて切腹致す我存念暫しが程の御惠、御聞届下さらば、忘れ置  
じと手を摺て、頼めば正清につこと笑ひ、詞、事明白成る汝が願ひ、  
尤其理あきにはあらね共、敵たる此時節諸卒の疑念もいかあり  
万事は主人の賢慮に有ん、日も早西に傾けば、同道と、正清が深  
き心の計らひや、士卒來れと夕ばへの、下知の詞に、はつと、立

上れ共内心ならしんは、久吉討ん血氣けつぎの若者毒蛇の口の、水筋みづすぢを伴ひてこそ  
行過ゆきすぎる、向ふ遙とほに漕渡こぎわたる主は誰共白浪しらなみを、振ふると衣こゝろの戀無常こひむじやう、急々いそいで船  
路ゆくそとや行空ゆくそとも浮世うきよ、なりける「次第也」

繪本太功記

○六月四日の段

東魚とうぎよ來つて四海よつしほを呑む、西鳥さいと來つて東魚とうぎよをくらひ、四海よつしほ既に穩おだやかな  
らざる戰場せんぢやうの地の理うらみを窺うかがふ山づたひ、近習ちかじゆ召連隆景たかひげは、しづく谷  
間に立休たてやすらひ、詞ことばく旁此度このたびの合戦くわせん誠まことに武門ぶもんのはれ軍、郡の枝城尾  
田いづが爲ために悉ことごとく落城らくじやうに及びし上、軍慮ぐんりよに賢さかしき清水しみづが城廓じやうくわく、久吉ひかりぎよが謀  
に乗せられ、入水いりみづと成なりたる高松たかまつの味方みかたを助たすん其爲そのために、はるく此土このち  
に陣ちんを取とれ共、敵てきの要害やうがい強つよくして、味方みかたを救すくへ術てがてなく、三家さんかの心も  
まぢくたるに、三澤さんざわ久代ひさよが非道ひだうの企隆景けんりやうが見察けんさつ違ちがはず白狀びやくじやうの上に  
本もとへぼつ返かへし禁籠きんろう申付まをすし上は、敵方てきかたへ裏切うらぎなさん妨さまたげなければ、先  
此山このやまの頂たかに柵さくを結ゆひ敵陣てきちんを見つみもり、明日あした中に攻せめかゝり、敵てきの勇



氣を試んは、くいかにく、い、仰迄も候はず、我々共は先手を乞請雌雄の合戦、一命は風前の塵義は金鉄、千變万化とかけ破り、さしも名を得し久吉が頭を取んな瞬く内、御心安く思し召と實いさましく見へにける、遙向ふに人音は何者成かど見やる内、現世未來を一寺に納め、大地の僧頭安徳寺、清水が妹玉露姫、伴ひ歩む一木の影、それと見る、より手をつかへ、詞、隆景公には御堅勝のてい恐悦至極、拙僧今日清水長左衛門様へ御見舞に参りし所、妹御玉露様を以て何か密談の御使、味方の諸士にも心置く籠城、幸なる安徳寺誘ひくれよとの御頼、委しき子細は存せぬ共、是迄同道仕ると申上れば玉露も面はゆげなる顔を上、詞女のあられぬ事ながら、敵の陣所へ使の役、隆景様の御賢慮を、伺ひました其上と、兄上の差圖故、安徳寺様諸共に御見舞旁参りしと、差出す文箱小梅川、手に取り上

て讀下し、詞、一旦和議を相調ひ、事を計らん計略有れど、先達て申遣はせし所、此使に惠瓊老、清水の妹玉露を差越んとは面白し、去あから大地の住職、敵陣への使者とは憚り有と、他聞を恐れる密事の大役、足下ならでは叶ひがたし、先陣屋へ入せられ、暫時の休足あるべしと、詞の折もこなた成る、茂の枝に飛違ふ數多の鳩が、あらうら餌ばみ、隆景屹度打詠め、詞、あれ見よ、只今鳥類の餌ばみの争ひ、思ひ合すは昨夜の夢、我陣中へ飛くる村鳥、色めきたる草葉をくはへ、塵塚山をちしたると見へて夢散ぜしに、目前人を恐れず餌による鳩の嘴先にて、責つゝきたるア、あの蔓物、瓜は春長の紋所、三つ五つは五躰を表し、其身を包む衣服こそ敵の城廓、鳩は源家の臣鳥、我は清和の末孫たり、此蔓物の瓜によりし、尾田春長を一戦に討取べき神の告か、但しは既に變有告か、あやしやと明

慮の大將、尾田を討たる光秀が、京都の大變神鳩のふしぎは後にぞ  
 しられたり、安徳寺すゝみ出、眞人の仰至極せり、唐土周の世  
 に當つて、赤色の鳥武王の陣に泊る、人々怪しみ迷ふといへども大  
 公望是を吉ありと、悦す、果して其詞に違はず、周武の正に天下と  
 成、君にも眞其如く今陣前に鳩の集りきたるといふは當家の吉瑞、愚  
 僧もそぐはぬ戰場の、役目もやはり此姿、赤色ならざる此衣の頭を  
 かしに取入て、強氣の尾田方取ひし々も、國家の御爲天下の爲、玉  
 露様にも御油斷有な、御念に及ばぬれ僧様、わたしも名にあふ  
 清水が妹、見馴聞なれ軍學軍術、夫に迫り力を合せ、味方の怒り兄  
 様の、無念をはらすは敵の大將久吉が、首討取て立歸らん、やはか  
 仕損じ申へきと、詞涼しき玉露がねめる色なき武家育、さもいさま  
 しく見へにける、かゝる所へ味方の郎等片山藤太、水にひたせる惣

身の、汗諸共に押拭ひ颯仰の如く水中をくゞつて敵の陣所に近付事  
 の様子を窺ふ所、猶も流るゝ水筋を、せき切る手當の石槽、或は  
 土俵蛇籠の用意、是をさゝゆる清水が郎等、忍び入て水筋を、切ん  
 どあせれど敵陣の備へは名にあふ加藤正清近寄る軍兵事共せず、右  
 と左になぎ立て追立切伏られ水の哀れと流行清水が勢の敗軍は、目  
 も當てられぬむざんの有様、かくて空しく時日を送らば底のみくづ  
 と成行城兵、御賢慮有て然るべしと、息繼ぎあへず訴ふれば、隆景  
 は打點頭、詞かく迄敵に取切れ、ぬけがけして高名せんとは、自殺  
 を招く清水が城兵只此上は惠瓊老、宗治と申談せし如く、玉露諸共  
 久吉が陣所へ立越、兩家和睦の計略こそ肝要あらんと隆景が、詞に  
 はつと頭を下、詞修羅の巷へ出家の身の、入べき筈はなけれ共危急  
 を教ふる教の道、玉露様には御用意有といふみ進めば神妙く、兩

將人も此趣具に某言上せん。平兩人も本陣へ同道申さん來られよと  
物に馴れたる小梅川、其名かえはし武士の、刃切れ尖さ直焼及  
たひにきたる隆景がほまれは世に顯はせり

繪本太功記

○六月五日の段

聞鱗山揮一同して風雨烈しき中國の、物騒がしき蛙が鼻、久吉公の  
陣館亂杭高垣慕ゆひ廻し、兵具ひつしとならべしは、事嚴重に見へ  
にける、太郎兵衛治郎兵と呼集め、落葉枯枝をかき寄せて、瀑氣を  
拂ふ雜兵共、一つ所に寄集り、何と斯した所は、かんしやうゆうの  
煙りと出かけた、今にも合戦といふたら戦場の切合、集錢出しの  
呑くらひ、軍場の小商人の手目上させてやらふ物何をいふても長の  
籠城、我身で我身の儘あらぬと、重き口から、からぞめき、ちんふ  
ん勘六智恵有顔、尤なりいさまし、某迎も戦場に出立なば、  
彼唐土のあぼす東六が奇計を以て、鎗先尖さ餅田樂申さし乍ら擲喚

鬼殺しと見るならば、あたり次第に呑はして代物といふ大敵には、喰迄、呑迄早いが勝と惣だが、咄しの耳を突抜鐘、詞「スリヤ」こそ軍が始まると、達者な物は口斗、足もしどろに立て行、スハ事こそと加藤正清、一間を出る庭先へ雑兵一人かけ來り、詞「只今遠見いたせし所、あやしの兩人陣中さして參るよし、引どらへて詮議に及び候所、郡高松兩城より使者として女一人、僧一人、通しませうやと窺へば、使者と有れば捨も置れず案内致せと追つ立やり、待間程なく取次に、從ひ來る葉月の、使者は二八の品形振の袂に名香の、高き寺僧諸共に使者の座にこそ、着さにける、正清威儀を繕ひて、詞「是れはく郡高松兩城よりの使と有て珍事の御兩人、御使者の趣承はり、加藤取次仕らん、様子いかいと正清が、尋ねに愛持玉露が、詞「ハ、正清様とやら御取次の段御苦勞に存じます、自らは高松の城將清水宗治が

使玉露と申者「清水申越る、趣は此方の家中浦邊山三郎と申れ若衆様「其山三郎不慮に城内を抜出たる不忠者、御かくまいの由承はり、早く使者を以て所望に及ぶといへ共、御歸し下されざる段我共不審はれず、もしや使の不念不骨なる事ばし有て武士の意地を立ぬさ御歸し下されんも計りがたし、此度は汝參つて御機嫌の窺ひ、同道して立歸れど有使の口上、御前宜しく御披露と詞のあやも玉露が、詳に相述る安徳寺詞を正し、詞「玉露の申さる、通り、浦邊山三郎は郡の家人同前故、此方よりも使を立てといへ共御承引なきによつてあたま役に愚僧が使、どこもかくにも貴所の御執成偏に頼存ると、頭を下れば加藤正清、詞「何事かど存せしに、浦邊に付て何日といひけふといひ、何か事も有さうなる三家の胸中、軍はわきへ取置て、福原梶田の勇將等馬を出さる、は此虎之助一切合點參らね共、女義

の使出家たる御方を、追返すもおとなげなし、取次は致し申さんが  
 暫時隙入事も有ん、あれある一間に相待れよ、然らば後刻と式禮目  
 禮、玉露引連れ安徳寺左右へ「こそは別れ行、朱明の空も一面の  
 雲かけ隔の浮草の、浪に漂ふ山三郎、又降雨に足音の紛れ出るもし  
 めくくと、いとゆうさをや重ぬらん、後のこあたに玉露が、物音窺  
 ひ立出る襖もろつと人目の關、盡ぬるにしの顔と顔、なふまつかし  
 の山三様御身にお怪我はなかりしかと、絶り付いたる振袖のな  
 らぶ翼や連理の縁、妹脊わりなく見へにける、詞是は思ひがけもな  
 き玉露殿、何故爰へは來られしな、此城中へ入込しも兄様の深き  
 御思案、お前に逢て力を合せ、眞柴を討てとくれくの仰、首尾能  
 く仕負せ立歸らば、誰憚らぬ夫婦中、手柄を見せて下さんせと、夫  
 頼の女氣は、胸にやるせぞなかりける、詞、我もやたけとはやれ共

一かたならぬ名大將、猿冠者の猿智恵と聞しに違ふ眞柴久吉、此軍  
 配に我々式が及ばんや、所詮すごとく高松へは歸られず、清水殿へ  
 の申譯、只今腹切相果る、其方は立歸り此通り傳へてたべ、さらば  
 と斗柄に手を、かくる夫に絶り付、詞、待て下さんせ、姫ごせの身  
 で敵城へ、お使者に來るも何故ぞ、お前に逢いたさ顔見たさ、死ば  
 一所どかたらひしわたしをふり捨死ふとは、聞へぬわいな胸欲な、  
 わたしを先へ手にかけて殺してやいの我夫と、命惜まぬ武家育、涙  
 色めく婉變の袂は、戀の淵あらん、涙隠して山三郎、詞、いらざる  
 りり言嗜まれよ、敵へもれては互の耻辱、うて放されよと突き退る、  
 詞、わたしも恨にとあらそふ後、早まるなど聲をかけ、立出る眞  
 柴筑前守久吉、詞、高松より使者に來りし玉露へ、山三郎を返しわた  
 する、又浦邊へは此書面、久吉が心を込めし清水殿への送り物、此

役目仕負せなば、拔群の高名手柄早々小船にて歸城せよと、差出し給ふ情の賜、其文章はしらね共一先城へ立歸り其上生死を決せんと、心定めて押しいたし足早にころかけ出れば、矢の跡に引うふて命の親の久吉様と、悦び足も地に付かず、飛が如くに立歸る又も聞ゆる陣鐘につれてかけくる女武者、金石ならねと湯王鏖万葉を亂し都より、夜を日に繼たる阿野の局、詞久吉公に御見參とさへる組子事共せず、廣庭づたひ、歩みくる、ヤ者共某に逢んと有女武者、曲者なり共何程の事や有ん、對面して取せんず、者共引けと御下知の聲聞取て阿野局、久吉殿かといふを押へてあたりを見廻し、詞音高しく、御自分の形相一と方あらず、一大事の注進ならば、敵へもれては味方の非運、心を付て物語られよ、腹帯しつかと、即座の氣付、様子はいかゞ、何となく、ハア、されば候春長公には安土を立出ま

し、く都本能寺に入らせ給ひ、中國加勢の御手配諸軍を催す時ころ有れ逆臣武智が夜討の企、詞何光秀が謀叛とや、勝利はいかに、ハア、明れば二日子の下刻水さへ音なき眞の間、早洛陽に亂れ入り夢驚かす俄の戰場、詞太刀よ具足もどばしき寺内、數方の敵は甲冑に身を固めたる小手脚當、味方は薄衣綾錦濃紅の玉襷、詞自始蘭丸兄弟、死地に入たる働に庫裏方丈も忽に、血汐くま取修羅道の巷に迷ふ築山かけ、射つ射られつ切つさられつ劔の山、八寒地獄となる鐘は五臓を射抜君の弓勢、先手の軍兵一筋の體につらなる三人五人恐れをなして引退く、詞君には御安体にてましますか、氣を付られよ阿野の局、君には御安体にてましますか、心元なしいかに、ハア、申も便なき事ながら、運の盡さどて蘭丸殿、田嶋が手鎗に無念の最期、勝に乗たる光秀方、味方は残らず討死し春長公にも

御腹召れ、三法師君は、若君様は、細川殿へ落しまいらせ二條の御所も一時に亡び、火中の煙と失給ふ是を筐のお家の御旗此上は久吉殿の智略にて、武智を討取亡我君の尊靈に、手向てたべや真柴殿と死る今端の際迄も、君を大事とはり詰し心の花もがつくりと折てちり行真心貞死、義女の鑑を殘しける、始終の大變聞久吉、身体忽ち壞敗に苦しめ、途方にくれて居たりしが、つゝたち上がり大音上げ、詞ヤ旁、我を謀女が不敵、只今某切捨たりと、諸軍の心迷はさぬ道智人の名大將、先立主君亡人の生死は同じ梓弓吊ひにこそ入にける、無常に傾く、夕陽は、坊主わたまものび欠び、時刻移ると安徳寺、エン惠瓊は咳拂ひしづゝ歩み獨言、詞ヤレ此永の日中待せて置、返答もせぬ上に鷹爪はまたな事、鼓屑一ぶく志さへなま大將、主腹斗肥すと見ゆる、餘りな釣付け様佛の顔も三家の使、歸つて此由申

上んと行んとす、詞ヤ「安徳寺惠瓊和尚いづれへござる久吉對面仕らんと聲かけられ、ハ、いや早愚僧は生れ付いたる近飢、餘りの隙入に甚腹中窮困にせまり、一つ鉢の御芳志に預り度勝手へ參るといふを打消し、ハ久吉が志の供養有事を、眼前見捨て歸られるお僧の心底いぶかし、そこ動くなど眞柴久吉、障子をさつと押開き、上段に傍置いたる金鴨の煙も薫する、手向草、心憎しと尻目にかけて、詞ヤ大將の詞とも覺へず、出家たる我をいぶかり動くとは、物を知らざる今の一言、ヤいふな惠瓊、都の大變立聞して、郡へ注進せぬず心底隠しても隠されまじ、軍勢を引入れ、修羅を導く惡僧、寺領が望か知行が望か、返答聞かんと未前の眞柴、屈せぬ惠瓊、大口明いて高笑ひ、詞ハ、ヤぬかしたり猿冠者、愚僧をとらへ惡僧とは何のたは言、儂が主たる春長は、伊吹山の鬼の再來、諸寺諸山迄賣

苦しめ、佛敵遁がれず本能寺の庭に於いてのたれ死したる尾田の幕下、主に劣らぬあはれ者、五畿七道でくらひたらず、此中國まで攻下り民家を苦しめ、人種を絶さんとする魔王の根元、亡し絶すが佛の役、奇代の名劍受取れど、はつしと打ばしつかど留、詞へ、出家に似合ぬよき嗜、童おどりの坊主が悪口、久吉が耳には入ぬ、誠相手に成りたくは、天地の道理成佛の明らかなる事を悟りし上、相手に成りて取らせんと、飽迄きびしき嘲弄に、奥齒碎くる無念の眼中つかくと立寄り、眼尻逆立息をつぎ、詞へ、威勢にのり人もなげ成今の悪言、當時安徳寺の大寺を踏へる此惠瓊、童劣りとは何をいふや久吉、たどへ大寺の名僧たり共、心中六道の迷ひ有ては、成佛の道思ひもよらず、汝が目より魔王と見拔し某が、天地の道理をしらせんと、惠瓊を目かけ打かけ給ふ以前の蓮花衣、是はいかにと

ためつすがめつ見て悔り、覺の袈裟へ矢剝の橋にて、天下を得ると見付置いたる奴殿かど呆れ果たる斗也久吉につこと笑はせ給ひ、一いかに惠瓊老、其時はたいなしの一文奴、算木書物も當てにはならぬと貴僧の詞、後の證と其時に申請たる、其袈裟、矢剝の橋にて我面相見侍し貴僧の天眼通、此久吉が望む出世にあらぬ共、天より生ぜる惠なればりしくな思ひを惠瓊殿、詞此上は尾田と郡の和を結ばるゝが出家の役、よもや遠變は有るまじと、名智の詞に安徳寺頭を摺付く、詞へ、理非明白たる御仰、訓狐といへる物は夜は微塵の虫をも見れ共、晝は大山さへ見る事あたはず、此坊主も眞其ごとく、御身黒とんたる日かげの其時はよく奇相を見分たれど今天下に名を得、武威白晝にかやく時の相見わたはせ見損せし訓狐に等しき此坊主に和議の御証は冥加至極仰に従ひ和談とへの奉らん、早速の



會得は道の名僧、一刻も早く急がれよと、仁者の詞に、はつと、天より照す久吉の威勢に恐れ引かへす、道は道なり明らかな、心てらして立歸る、跡見送つて久吉公、心をこらす軍慮の庭先、見越の松が枝はつしと射たる、矢文はいかにと立寄てかなぐりひらけば返書の實名、清水が自筆一紙の血判つらくと讀終つて表に向ひ、高松の城主清水氏、眞柴久吉が一書の胸中射抜しは適く、此上は三流を切落し諸人を助けわたふべし、いさく是へと清水長左衛門宗治、兼て期したる討死の、弓矢打捨庭上にとつかと座し、詞、天運強き久吉殿、只今射込みし矢文の返書、彌御承知下さる上は、味方の助命頼み入ると、鎧脱き捨腹一文字に引切苦痛、夫の跡をしたひくる、妻は手負と見るよりも、のふいたはしや悲しやあ、斯した御最後させまい爲郡一家の人より、わたしと以ての御教訓無になすの

みかいたいけあ、此子は可愛ふあいかいと夫に縋り伏轉ひ前後もわかず泣居たる宗治苦しさ目を見ひらき、詞、愚や女房何くり言、那三家の人々は某か胸中をよく御存知そち達親子に今生の、暇乞させんず爲の御情、冥加なや、有がたや、一才の時よりもくらひ込んだる大祿の、恩義はいつか謝すべきぞ、詞、夫に引かへ小知の銘と主恩に命を捨る、數萬人の最期をば助けん爲の此切腹、玉露山三が密書の使心を込めし久吉の書中、味方に取ては盲龜の浮木悦べ女房何はへる、氣を張詰めて倅をばよき武士に仕立上、主君に忠義を怠るなと高松の良將も、子故にくらむ深手の苦痛、見るに付ても彌増る夫の最期稚子の行末、思ひやり梅は女の淺い心から、太守の仰誠ぞと斯した別れを知らせしてお跡をしたひきた物を暇乞さへるくくに云たい事の數くを、いつの世いつの添ぶしに語らふ物を情なや

何にもしらす稚子さへ虫が教へる寐覺の愛、てうちくは父上の、今端を拜む合掌をやといだきしめく伏轉びたる女氣を不便と察する久吉公こたへこたゆる宗治が恩愛一度にたもちかね清水涌くるはらく涙血水川邊に浪越て土砂吹飛す如く也哀を見捨て真柴久吉かしてを岐度打見やり、詞なく見られよ兩人相圖を以て川筋の土俵岩石嫌ひなく、切て落せばありくと平地とおさまり城外へ、遁れ出たる老若の悦びの聲鯨波、コレ見物あれと大將の教にはつと心付詞、幸ひ成かき是に物見と、よろばひく腹帯まつかと白布の高見を傳ひよち登り、見ひらくまぶたに高笑ひ、ハ、女房悦べ死後の思ひ出此上あし、浮世の夢もけふ限り昨日の敵はむれぬる白鷗、鯨波と覺へしは、浦風とこそ、聞へけり、我はあしたの露とさへ清水流る、柳かげまばしが程の世の中に心のこさぬおさらばと、白布とかん

とする所へ、詞なく宗治しばしく、小梅川隆景安徳寺が理解によつて尾田家一体水魚の因、見届けて成佛有れと、聲諸共に大將隆景衣服改めまづくと入來る跡に安徳寺、手に捧げたる白臺は神文とこる見へにけり、互に和義を取納め、惠瓊は神文押いたいき、詞ハ、目出たく和談と、あふ上は拙僧はお先へ歸り久吉公の御神文兩家へさし上奉らんと、禮義も足もいさみ立、衣しばつて歸らる、久吉は詞をわため、詞兩家和順におよぶ上は何をかつ、まん、主君尾田殿都本能寺において、武智が爲に御落命と、聲かさくもる一と隼万里にみちて、袖しぼる、驚く人々制する眞柴、たるみを見せじとつと立上り、詞主人の敵武智光秀、都に登り吊ひ軍三家の助力あるやいかにと、聞より隆景につこと笑ひ、詞、軍のそなへ有りながら手をむさしくせし味方の若者、とさたて置たる弓矢の手前、ぬがふて

もなき後詰の加勢、嗣隆景采をなし申さん、頼もし、早く、早  
 上京の用意をなさん、者ども早くと御下知に、加藤正清始とし人馬  
 せばしと居ならんだり、うれひにしづむや梅をいさめあだめて隆  
 景公、嗣父に劣らぬものふと小梅川が成人させん、心残さず旅立  
 と、こもる情につこと笑ふがいとまごひ、此世の念も宗治が忠義  
 の家名稚子をもうりそだつる仁者の道、雪され空も青くと、天王  
 山の晴いくさ、名をとる射とる弓矢とる、天下を鳥の聲につれ、い  
 ざや武智を討んぞと勇む正清両將も、都をさして出て行く

繪本太功記

○六月六日の段

扱も逆賊武智光秀、多年の恨一戦に春長父子を討奉り、妙心寺に岩  
 を搆へ勝はこつたる諸軍の勢ひ、俱に威風を顯して備へ厳しく守り  
 ゐる、中央には光秀の母さつき、褥の上に座をしめて、イヤ四王天、  
 詞何事も見ざる聞かざる云はざるに、咄しが有らば嫁女庚申待、緩  
 りと聞かふトイヤ奥へいて夢でも見ましよと、立を引き留田島頭、後室  
 様の御立腹、其理あさには有ね共夫れは一途の思し召、幕下と成つ  
 て春長へ、身を寄せたまひし御大將時を得て其機に臨は、天の時を  
 知といふ、何卒御機嫌直されて光秀公に御對顔、偏に願奉ると願へ  
 ば俱に嫁操只幾重にもと手を突て、願ふ心の夫思ひ、道理にも又殊

勝なり、さつさは少し面を和らげ、詞夫程に迄皆の衆が、頼みを聞ぬも年寄のかた意路、そんなら息子殿の歸り次第奥へしらしや、コリヤ女共は来て腰を打、アアと老の立居もおもくくと、嫁が介抱四王天、引添てこり入りにける、斯たる世にも花開く、色香もまゐるまゝ初菊が、奥の透間を立出て、詞はんに、此重次郎様は、しんきなお方ではあるはいなアこちらの思ふ様にもあひ、間が透が軍學とやら色の道には疎いので、一倍心をいためると、女心の物思ひ後に立聞く重次郎初菊殿是にかと、いふ聲聞いて、詞ア重次郎様か、ア、聞へぬわいなと計りにて跡は得言ぬ、おぼこさは、赤らむ顔に顯はせり、詞是は又嗜みやいのふ、又してもく、顔さへ見れば恨のたらく、親の赦しを受け、未來永まかはらぬ女夫、少しも隔はあいわいの、ア、いづのんどもふ、しんきな永まどやら未來どやら、其先の世は、し

らぬ共、縁を、結ぶの神様が、御苦勞なされうない子の、ふり分け髪の中から、あれと是との結び合、親の赦しも有る物を、ついに一度の逢瀬さへあひは、餘り嗣欲あ、お情あいと娘氣の、胸の有りだけ、かきくどさ恨かこつろ道理なり、思ひは同じ重次郎、詞ハもふ今迄は不調法、以後は急度嗜む程に、コ赦してたもく、そんなら願ひを、誰憚からぬ云號、世間廣ふ遠慮はいらぬ、忝や嬉しやと、ひつたり抱付く妹と脊に、わりなく見へしゑにし也、折から轟く響の音、光秀公のお歸りとしらせに、悔り飛退く二人、所体繕ふこあたより、妻の操も出向ひ、待間程なく立歸る武智十兵衛光秀、武威轟かす強將の常にかはりし屈詫顔、席を改め詞を正し、詞ハ、三人とも出向ひ太儀、母人には御嫌機よくお渡りなさるか、ア、先程も田島頭ど自がわつくといつ、どふやら斯やらお口が和らぎ、母

公様とも陸じう、夫れは重疊出かいたく、左有らば直様御對面、  
 夫れに及ばぬ、母が直參らんと思ふちかけを引かへて、木綿  
 布子に風呂敷包、せきにちよつこり賤の女の姿、見るより驚く人々、  
 操は傍に摺寄つて、詞系圖正しき武智の御家、殊更四海の武將とも  
 仲がれ給ふ夫光秀、天下の御母公様共云はる、御身が淺ましきお姿  
 は若やお心違ひしかと、尋ねににこと打笑ひ、詞系、忝くも清和  
 源氏の嫡流たる武智の系圖、元より武勇の家柄あれば、誰に恥べき  
 請なし、年は寄れ共心は鉄石、渴しても盗泉の水を吞ずとは、お身  
 達もよふ知てるやる筈、心穢れた我子の傍片時も座を同じうせんは  
 我日本の神明へ、恐れ有り、伯夷叔齊をならい只雲水に従ふて  
 出行母、是が此世の別れぞと、義強き母も恩愛の、涙まぎらす有様  
 はいどい、哀ぞ増りける、光秀は默然とさし伏ひていたりしが操の

方は涙ながら、詞申我夫、母様の只か一人、いつくを當と長の旅、  
 なせお留めされませぬぞ、不忠不孝との御さびすみ、今更申す詫  
 もなく、せめては母のお心にさからはぬか寸志の孝、四海の内は此  
 光秀が掌に有る、おとめ申な其儘、道は悪人程有て根強い  
 魂、云ん方なき人外めとにらむ目元にはらくと涙かくして立出  
 る、心のはり弓強弓の引を、煩ふ嫁孫の中に悲しき初菊が、是のふ  
 申祖母様と扣へる手先ふり拂ひ、見返りもせせ出て行、はつと泣き  
 出す人々を、制しといめて、詞者共、母人の御行衛いつく迄も見  
 届けよ、御手道具の用意くと光秀が鶴の一聲あまたの軍卒、簞笥  
 長持挾箱、其外雜具紙乗物、御母公様のお姿を、見失ふなど足早に  
 跡をしたよて急ぎ行、影見送りて光秀は、何か心に打うあづき、奥  
 操伴重次郎、嫁初菊諸共次へ立ちやれ、用事あらば手を鳴すと、

必有げ赤詞のばし、たぢかめとばいへど立兼る、ヤぐすくと何を猶豫早く立よとさめ付けられ、心は跡に残れ共親子三人打連て、是非なく、次へ入相の、鐘が無常を、告渡る、實物凄さ庭の面、忍び出たる四王天、主君の様子いかゞとど、身を潜めて、窺ひぬる、夫とはしらぬ光秀が、有合硯引寄て、筆くいさめし唐紙の、表に何やらさらさらかくくと、見るより重次郎瞬もせず陰物に、守りぬる共、白書院、只一心に書認め、筆投捨てひんづと座し諸肌究げ指添を、扱や玉ちる氷の刃や、打詠め両眼に、はらりと涙くいさばり、既に斯よと見へければ、主従小影を走り出、早まり給ふな父上と、取付く重次郎四王天鏡の如き両眼をくわつと見開き聲震はし、詞我君、コリヤこた狂氣召れたの、今朝より始終の様子、心得がたく思ふ故、萬事心を付る某、物陰より窺へば、出し顔に辭世の一句、順逆二門なし、大道心

源に徹す五十五年の夢、覺來て一元に歸す、とは何のたは言、君臣を見る事塵芥の如くせば、臣君を見る事怨敵の如しと、春長猛威に増長して、神社佛閣を焼失し萬民を苦しむる暴惡、神明是を誅するに光秀のお手をもつて討し給ふ天の與ふるを取らざれば災ひ其身に歸す、左程のことを申さざ共、よく御合點のとあた様、切腹どハ馬鹿くしい、人はしらす此四天王田島頭殺す事罷ならぬと居丈高、與ま、そふじやく父の命は我々始萬卒に至る迄、御一身に及ぶ御命、臣義を守る共、君是を補助せざれば、大將とは申されず、只生害はといまり給ひ、下萬民の苦しみを救ひ給へと右左り、涙と俱に諫めの詞、光秀ははたと横手を打、誤つたりく、詞一天の君の御爲には、惜からざりし此命、暫しはながらへ事を計らん、先は繪旨を乞受て、猶も背かん者共を悉く誅戮せん、詞急ぎ是より我は參内、汝

ら二人は久吉が、都へ登るを半途に待受、一戦にばつ返せよ、イ装  
 束をと立上れば、近習小性が心得て運ぶ、大紋立るばし、立派に  
 着なす、骨柄は邊り輝く其粧ひ、早引出す栗毛の駒、光秀ゆらりと  
 打乗て、重次郎、田島頭諸共に西國へ馳向ひ、必共に、油断なく軍  
 功を顯はせよと詞にはつと四王天、君、御出陣に及ばず共、詞某  
 彼地に向ひなば、猿冠者めが素頭を討取るは手裏に有、イ、彼も知  
 れ物、定て遠き計畧有らん、親人の詞共覺へず、父にかはつて某  
 が、軍配取て一戦に敵の首を實檢に備へん、氣づかひ有など勇みす  
 しみし我子の骨柄、天晴く潔よし、我も跡より出陣と、手綱か  
 いくりしとく、乗出す駿足馬上の達者、轡の音は秋の野の虫には  
 有でりんくく、綸旨をやがて頭に戴き及向ふやつ原打立て、追立  
 切ちらし追付け四海に葉を伸ん、いろふれやつといつさんに大内山

くろ「急ぎ行

# 繪本太功記

○六月七日の段

接化せつくわ隨緣ずいごん眞實しんじつに無量むりやうの惠めぐみみ洩もれされ共、佛敵ぶつてき猛威もうゐの春長はるながに世よを狭せまめら  
れ鱧うなぎ重成しむせ、無念むねんをがらも杉すぎの森もり砦とりでをかまへゆしくも、寄手よせてを防ぐ  
唯一いひ心矢こゝろや叫こゝろびの音ね聞きの聲こゝろ天地てんちに、満みちて動搖どうごうせり、かゝるけはしき其  
中に、媚なまめさつたふ婢めかけ共、軍いくさに馴なれて氣きは張弓はりゆみ襷たす鉢はち卷腰まきこし刀やいば、遠とほゆしき  
身みの備そなへ、中なかに小笹こささが才さい發はつ顔かほ、詞ことばのふ浪江なみのゑ、何なにと騒さわがしい世界せかい  
ではないかいの、切きたしと切きつはつゝを世よ渡わたりにまだ仕つかたらいで  
春長殿はるながの、慶けい覺かく様さまを相人あいにんに取り憎にくてらしい軍事いくさ、サイサイ追お付け如來にょらい様の  
罰ばちが當あたり、首くびがころりと飛とであるといへば兵卒へいそつ口くちに、詞ことばチ、ササ飛とども  
く一向いっかう一心いっしんにかたまつたる我われ、殊ことごと更さら主人しゅじん喜多きた頭かぶ様の軍配いくさ、石山いしやま



においても度々の勝軍、負る事はけんによもない事、残り多いは  
 主様の御挨拶、あたまたの役でおとなしく丸ふ納めて慶覺様が、石山の  
 岩を引拂ひ此杉の森へ御陣がへ、しやうこりもなく又寄せかけた尾  
 田の大軍、とつと寄ても不可思議光如來のお力にや叶ひませぬじや  
 ないかいなわいな、あいな、チツト待つたり、叶はぬ次手においとし  
 は若旦那孫市様、尾田と和睦が破れた計に御使の越度じやと爺御様  
 の御勘當、何と可内、御詫の願ひを一統に、して見る心はあいかい  
 やいと、おろく涙惣すが、すゝり上たる水涕も、忠義のはしと殊  
 勝也、斯どもれ聞く一間より孫市が妻の雪の谷、我子の手を引きしと  
 やかに出る姿もおのづから、思ひ有る身の打しはれはんに主なり家  
 来なりと、思ふて優しいそち達が志し、聞く嬉しさにいと猶、  
 悲しき夫のお身の末、どふある事と自が、心の内を推量してたもやい

のふと有りければ、婢始士卒共、顔見合せて詞なし、娘松代は母の  
 顔打詠め、詞申母様おまへは何をむつかるぞ、同じ様に皆迄  
 も何を泣さやる、早ふと、様や弟の重若を呼まして来てくれやい、  
 此間の清書をお目にかけて、譽てもらいたいわいのふ、譽てもらひ  
 たからふ、そなたより此母が逢たさは山々、暫しが間も母の傍、得  
 放れぬあの重若、定めて泣てばかりあるで有る、かあいの者やとくい  
 まばり、泣音を包む雪の谷が心の中ぞ、せつあけれ、襖のあなたに  
 重成が高らかに咳拂ひ、扱は舅君のお出なるぞと、いふに心得婢が  
 席を下れば雑兵共地に鼻付けてかつ腕ひ待間程なく悠然と、立出る  
 鱸喜多、頭、不興氣にあたりを見廻し、詞、女原、此所に用事はない  
 次へ立ち、軍卒共も何をうつかり、要害を頼みに搦手の守り怠るは  
 一大事、早くまはつて心を付けよ、行けくとおつ立やり、詞、

嫁女、ろちたにも云聞かし、悦ばず事が有ぞや、ア私に悦ばず事が有と御意遊ばすは、夫孫市殿の、又しても不吉者の倅が事、左様な事であり、當月二日の曉に天文の考みし所、東に當つて白氣自然と立登る、是則敵の大將、春長が腹身と頼む勇者の内、變心の者有て、事をやぶるの前表、今日迄口外せざれ共數日の籠城れ身も定て心勞と思ふから、安堵させん爲申聞す、見よく追付世を廣ふ、足利の正統たる慶覺君の御代となさん、何と此上もあき悦びではありあいかと、未前を察す明智の眼力、こなたの一途に夫思ひよき折からとすり寄て、詞もふお嬉しい段ちやござりませぬ、がどふぞ成ふ事あら、其白氣とやらが立ちましたか、孫市殿の御勘當がゆりますといふしらせなら、ほんにどの様に嬉しう存じませうぞ、憚りながら慶覺様と御一所に、どうぞ世に出られます様に、

親御のおじひお情けでと、いふを打けし、まだしつこい、詞かゝるめで度折からに、よしなきたは言聞きたくあ、お身も孫を連れて部屋へ行きやれ、何をぐすく、早く立ちやれとかみ付られ、何とせん方投首し娘松代を伴ひて、しはく立て入にける、跡に重成只一人立上つて、通路の鈴、引ならせば一間の御簾、さつと小性がかぐれば念珠他事なき慶覺君、重成が音づれ何事か有やらんと、仰にはつと頭を上、詞今朝より御機嫌を窺ひ奉らんと存ぞれ共、敵の朝がけ短兵急に寄たれば軍配に暇なく、一泡吹せ味方の勝利、攻口を退き候へば、一息の間と漸只今御前へ伺公、不禮の段は御高免と敬ひ、深く述べければ誠忠俊父の一人時に合ねば、此程よりの心勞推察せり、詞兄義輝君は三好松永が爲に亡び給ひ、今又我は春長が爲に斯の如し、よしなき命ながらへて萬民土炭の苦しみと云ひ、諸

卒の命を失はんより、早く我一命を断、萬死を救ひ得させよと、御目を閉て稱名を唱へ給へば重成も君の惠の有がた涙胸におさへて氣色をかへ、詞「チエ、云がひなき御仰、夫れ軍は和に有て衆にわらず、馬洗廐養に、等しき尾田の弱兵、何程の事や有ん凱歌を上るは瞬く内、君にもまろし召如く、國大なりといへ共戦ひを好めば必ず亡ぶと、詞「近くは武田勝頼、父信玄迄其威隣國にならぶ者なく猛虎の如く、諸侯も恐れ候へ共勇にはこり、武に慢じたる太郎勝頼、詞「累代め申せば慶覺法師、打うなづかせ給ひつゝ、重成來れと御座をば立せ給へる其所へ、大息ついで鷲森八郎、御注進と手を突ば、人といかにと仰の下、されば候軍は味方の勝利なれ共、力責には叶はじと、數千の車に燒草を積乗て櫓くの其下へ、山の如くに積重ね、たゞ

燒打にと云せも立す、喜多頭はつたとぬめ付け、詞「マ馬鹿くしい何のたは言、其荊柴ころ身が申付けたる一つの計策、御大將の御前あるぞ龜忽の注進、早く立てとわざと怒りの一言もえらで鷲森八郎は、拍子ぬけく引かへせば、いざ御入と八方に、心を配る重成が底意をくみて慶覺君奥殿さして入給ふ、夏の日の、長さも我を、恨むある物思へとや夕暮の、空を、待けり孫市が肩にしつかり鎧櫃、人目を忍ぶ陣笠の、歩にやつしたる條は、昔にかはる勘當の、身は猶更に心の隔、何とせんかた切戸口、イむ、こあたの茂みより忍び出たる大の男あたりろそく、窺ひ足、奥を目がけて忍び行、後の方より、孫市が、曲者やらぬと、謙をひんづと組で引戻す、詞「シヤちよこ才すなど振はどき、直に抜討ち及の光り、かいくいつて扱合はし手練の切先はつしく、打合及音何事と、手燭片手に立出る雪の谷

火影を覆ひ物陰に息を詰て予守り居る庭には二人が上段、下段、飛鳥の働さ孫市が難なく曲者切倒し、のつかつて、どいめの刀、血押拭ひ刀を鞘、納る丈夫死骸の懷中、探る手先に取出す一書、扱はと月にすかし見て、詞、當月三日に春長父子、光秀が爲めに亡びしと、心地よや嬉しやと悦び勇む後には、紛ふ方なき夫の聲、飛立計走り寄、逢たかつたと縋り付嬉し涙を先立てり、夫も追夫婦の愛情、や、打らるむ目をしばた、詞、誠や飽ぬ夫婦が銘に、倅を連て思はぬ離別、父の勘氣を蒙りしも暴悪非道の尾田春長、約を變せし故なれば、向卒さやつが首討取り親人の實檢に備へるば、勘當詫の綱にもと、心はやたけにはやれ共、倅重若召連ては、足手纏ひと未練にも子に引されて送る月日、鉄炮疵にて脚さへも思ふに任せぬ崎人者、詞、武運に盡し我身の上せめて御主君親人のお役に立て

死ん物ど、覺悟極る今日只今死後に頼むは二人の子供、心得たるかと夫の詞、聞く女房が泣出す、其口押へて、詞、親人のお耳に入らば返つて妨げ、倅倅を手渡しと、かたへに直せし鎧櫃、蓋取退れば重若が、か、様のふと走り出縋り歎けば母親も、胸に涙の満汐の引くや血脉と奥よりも姉の松代が聲聞付け、詞、おと、様のお歸りか、重若も戻つてか嬉しいく、早ふ遊ぼと手をたさ悦ぶ姉弟雪の谷が、膝に引寄せ聲曇らせ、詞、嬉しかるく、何ぼふ其様に悦びやつても、久しぶりでお目にかつたと、様は、腹を切らねばあらぬといのふ、孫市殿、是を見てかいのふ、何にもえらぬ二人の子供、お前は可愛ふござんせぬか、此姉弟をふり向けて、死る覺悟を極たとは、餘り氣強い胸欲な武士が立ても、捨つても、死さぬく死さぬと、かさくどくのも忍び音に、奥へ憚るうさ涙、道理としれ

と聲に角立、詞、未練至極の其はへ頼弓矢取身の切腹は此身の本懐  
 今計らずも寄手の大將、是角六郎を討て捨、懐中の一書を見れば、  
 都本能寺において春長父子、光秀が爲に討死と、春孝よりのあらせ  
 の密書、此騒動に寄手の奴原、一旦圍みは開く共「再び寄せんは必  
 定たり、危急を救ふは此孫市、君と父との命にかはり、首を則ち久  
 吉が陣所に送り和を乞は、元より寛仁大度の真柴、よもや違背は致  
 すまじ詞使は倅重若丸、兼て認め置たる一書、斯迄思ひ込たる某、  
 妨げなす不所存者、二人の子供爰へこよ、兄弟どもにと、が子  
 か母が子か、云て聞かさば賢ひ者と、撫つさすりつ尋るも、胸に無  
 量の思ひ有、心にしらで弟の重若と、様わしはお前の子でござる  
 はいの、何じやと、が子じや、よく云た出かしたあ、姉の松代  
 はとふじや」と、問を年だけうぢうと母に氣兼ねの言葉れば、詞よ、

返事のないは喚が子か、我子でなくば出てうせうと、呵り付けられ  
 泣くも、詞何のか、様の子じやとござりませぬ、と、様の子でござり  
 ます、ス、とちも我子と、よく云た出かしたなと、が子あらば、身  
 が云ひ付る事背さはせまい、ア親の云ふ事聞ぬ者は不孝者じやとか  
 様が常々からのお叱り、どんな事でも聞きまするのふ、重若うあ  
 たりも云ふ事聞さやるかや、アよう云ふ事を聞くはいのふ、扱うら  
 いやつ、然らば申付る役目が有、今と、が此短刀を腹へ突立たらば  
 な、此刀と脇差にて身が首を引切、此一書を添て久吉殿へ持参せ  
 ば此上もあき孝行者、合點がいたかと細やかに、云致ゆれば驚く母  
 にらみ付られくいしはる親の心はあらぬ子の譯も七つ子重若丸、詞  
 そんならと、様の首を此脇差で切と、孝行になりませるかや、なる  
 共く日本一の大孝心、姉様も合點かや、早ふ腹切て下されと、

いふにたまらば母親が、我子引退、詞「エ、忌はしい子供では有はいのふ、コレ孫市殿、いかに望が立たい逆何辨へない此子供に、親を殺せと教る人が又と世界に有ふかいのふ、夫や我子を安穩に置たい斗にとやかくと、心を盡す女房を思はぬ仕方情ない、親の別れも身の科も辨へあらぬ佛様、鬼にせうとは胸欲なせめて此子が生先を見届る迄生て居て下さりますが親の悲慈、頼むはいのと計にて譯も、詞も涙川膝に漲る風情あり、詞「ヤ、益あさ、諄聞たくない、三千世界に子を思はぬ、親が有ふかうつけ者、左程倅に此首を討たしがたく思ひあば、子供にかはつて介錯せよ、夫は、得心あくば縁切ふか、ヒやといふて是が、未練至極の其はへ類、所詮介錯思ひも寄らず、見さげ果たる女めと、取て引寄せ、提緒の早繩、庭木の杉にしつかりと結ぶ妹背の亂れ口、こがる、其身は梢の猿、腸を断らき思ひ

母の有様見るよりも二人の子供はわろく顔、コレ松代、重若もどし様の両の手に取り付て居や、必ず放してたもるかと、あせれと夢か現なき、夫は今を最期すと、諸肌脱は弟の重若、詞「と、様もふかや、チ、今が親への孝行時と、言つ、短刀我腹へぐつと立ればはつと散るから紅ひに目もくらみ心も消る雪の谷が、闇路をたどる思ひにて正躰もなく伏沈む、歎きの折も一間より、詞「倅其刀引廻すや、云ふ事有り父重成、まづくと立出、詞「ホ、適忠臣よくしたり、今こそ勘當赦してくれる、是を此世の思ひ出に、心静に最期をとげよ、とは云あから二人の孫、親の死別も夢現、嘸成人の其後は、歎くで有ふ悔みおらふと思へば不便彌増て、我は老木の末近く、便とるは母の親、むごい祖父じやと、詞「恨ではしくれるなよ、詞「我逆も骨肉の倅を見殺す胸の内どの様に有ふと思ふぞいやい、是非もあさ次

第<sup>だ</sup>やと、胸<sup>むね</sup>に湯<sup>ゆ</sup>玉<sup>たま</sup>の湧<sup>わ</sup>返<sup>がへ</sup>る、親<sup>おや</sup>の思<sup>おも</sup>ひの有<sup>あり</sup>難<sup>がた</sup>涙<sup>なみだ</sup>見<sup>み</sup>上<sup>あ</sup>、見<sup>み</sup>おろす一世<sup>いっせい</sup>の別<sup>わか</sup>れ、手<sup>て</sup>負<sup>お</sup>ひ涙<sup>なみだ</sup>れしといめ、詞<sup>ことば</sup>有<sup>あり</sup>難<sup>がた</sup>父<sup>ちち</sup>の惠<sup>めぐみ</sup>忠<sup>ちゅう</sup>孝<sup>こう</sup>全<sup>ぜん</sup>く望<sup>のぞ</sup>みは足<sup>たり</sup>ぬ  
 重<sup>しん</sup>若<sup>じやく</sup>松<sup>しょう</sup>代<sup>だい</sup>、最<sup>さい</sup>前<sup>ぜん</sup>と、が申<sup>まを</sup>付<sup>け</sup>たる役<sup>やく</sup>目<sup>め</sup>は只<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>早<sup>はや</sup>く、く、コレ必<sup>かならず</sup>ず  
 切<sup>き</sup>まい、切<sup>き</sup>たらば母<sup>はは</sup>があつゝをすゆるぞやとれとせば道<sup>みち</sup>子<sup>こ</sup>心<sup>こころ</sup>に、ひ  
 かゆる手<sup>て</sup>先<sup>さき</sup>、詞<sup>ことば</sup>背<sup>そむ</sup>くと子<sup>こ</sup>でないぞ、と、様<sup>さま</sup>の御<sup>ご</sup>用<sup>よう</sup>を聞<sup>き</sup>とか、  
 様<sup>さま</sup>が呵<sup>しか</sup>らしやる其<sup>その</sup>嗔<sup>ちん</sup>様<sup>さま</sup>への様<sup>さま</sup>に縛<sup>しば</sup>られて居<sup>ゐ</sup>やつしやる、コレ重<sup>しん</sup>若<sup>じやく</sup>、  
 か、様<sup>さま</sup>の、繩<sup>なは</sup>をといて上げてたもいふ、夫<sup>おつと</sup>れでもあの様<sup>さま</sup>に白<sup>しろ</sup>眼<sup>がん</sup>  
 しやるもの、何<sup>なに</sup>はと呵<sup>しか</sup>らしやつても大<sup>だい</sup>事<sup>じ</sup>ない、此<sup>この</sup>繩<sup>なは</sup>といてたもい  
 のふ、コレ申<sup>まを</sup>舅<sup>きゅう</sup>御<sup>ご</sup>様<sup>さま</sup>、同<sup>どう</sup>じ様<sup>さま</sup>に脇<sup>わき</sup>見<sup>み</sup>せずとなせとめて下<sup>くだ</sup>さりませぬぞ、  
 現<sup>げん</sup>在<sup>ざい</sup>孫<sup>まご</sup>を親<sup>おや</sup>殺<sup>ころ</sup>しにするが情<sup>なさけ</sup>かじいかひのふ此<sup>この</sup>繩<sup>なは</sup>といて下<sup>くだ</sup>されと、頼<sup>たの</sup>  
 む嫁<sup>よめ</sup>より頼<sup>たの</sup>まるゝ、舅<sup>きゅう</sup>が胸<sup>むね</sup>の苦<sup>くる</sup>しさを、こたゆるつらさ皺<sup>しわ</sup>面<sup>めん</sup>は、涙<sup>なみだ</sup>  
 に増<sup>ま</sup>る思<sup>おも</sup>ひ也、斯<sup>かく</sup>ては果<sup>はて</sup>じと孫<sup>まご</sup>市<sup>いち</sup>は、我<sup>わが</sup>子<sup>こ</sup>の腕<sup>うで</sup>先<sup>さき</sup>持<sup>もち</sup>添<sup>そ</sup>て、しつかと

當<sup>あた</sup>ればぐわんせなく、ともは力<sup>りき</sup>身<sup>み</sup>て、詞<sup>ことば</sup>と、様<sup>さま</sup>斯<sup>かく</sup>かや、チ、そうじや  
 出<sup>で</sup>かす、くも一世<sup>いっせい</sup>の別<sup>わか</sup>れ、二世<sup>にせ</sup>の名<sup>な</sup>殘<sup>ざん</sup>と雪<sup>ゆき</sup>の谷<sup>や</sup>が消<sup>き</sup>る間<sup>ま</sup>を待<sup>まち</sup>つ夫<sup>おつと</sup>  
 の命<sup>いのち</sup>、神<sup>かみ</sup>も佛<sup>ほとけ</sup>もない事<sup>こと</sup>かど、亂<sup>みだ</sup>るゝ心<sup>こころ</sup>亂<sup>みだ</sup>れ髪<sup>かみ</sup>血<sup>ち</sup>沙<sup>さ</sup>争<sup>あ</sup>ふ血<sup>ち</sup>の涙<sup>なみだ</sup>、上<sup>うへ</sup>には  
 父<sup>ちち</sup>が稱<sup>しょう</sup>名<sup>な</sup>の、聲<sup>こゑ</sup>諸<sup>しよ</sup>共<sup>ども</sup>に、りん<sup>りん</sup>の音<sup>ね</sup>、慶<sup>けい</sup>覺<sup>かく</sup>君<sup>きみ</sup>は他<sup>た</sup>念<sup>ねん</sup>なく南<sup>なん</sup>無<sup>む</sup>あみだ佛<sup>ほとけ</sup>、  
 く、なむあみだ佛<sup>ほとけ</sup>の回<sup>ま</sup>向<sup>こう</sup>の恩<sup>おん</sup>德<sup>とく</sup>廣<sup>くわう</sup>大<sup>だい</sup>、不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>にて往<sup>わう</sup>相<sup>そう</sup>回<sup>こう</sup>向<sup>こう</sup>の利<sup>り</sup>益<sup>やく</sup>、  
 にて還<sup>げん</sup>相<sup>そう</sup>回<sup>こう</sup>向<sup>こう</sup>に回<sup>ま</sup>入<sup>い</sup>せり、聲<sup>こゑ</sup>は如<sup>にょ</sup>來<sup>らい</sup>の迎<sup>むか</sup>ひすと、あゝくくと孫<sup>まご</sup>  
 市<sup>いち</sup>が首<sup>くび</sup>は前<sup>まへ</sup>にぞ落<sup>お</sup>ちにけり、あつと、恐<sup>おそ</sup>れて、飛<sup>と</sup>退<sup>ひのく</sup>子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>、母<sup>はは</sup>は其<sup>その</sup>儘<sup>まま</sup>打<sup>うち</sup>  
 倒<sup>た</sup>れ前<sup>まへ</sup>後<sup>ご</sup>不<sup>か</sup>覺<sup>かく</sup>に、泣<sup>な</sup>き叫<sup>ま</sup>ぶ、始<sup>はじめ</sup>終<sup>しま</sup>見<sup>み</sup>届<sup>とど</sup>け重<sup>しん</sup>成<sup>じやう</sup>が目<sup>め</sup>に持<sup>もち</sup>つ涙<sup>なみだ</sup>押<sup>お</sup>拭<sup>ぬぐ</sup>ひ、  
 聞<sup>き</sup>く、生<sup>せい</sup>者<sup>しや</sup>必<sup>かならず</sup>滅<sup>めつ</sup>の理<sup>ことば</sup>り今<sup>いま</sup>目<sup>め</sup>の前<sup>まへ</sup>に見<sup>み</sup>るも夢<sup>ゆめ</sup>、せめて夫<sup>おつと</sup>の切<sup>きり</sup>首<sup>くび</sup>に、暇<sup>いとま</sup>乞<sup>こ</sup>  
 をと立<sup>た</sup>ち上<sup>あ</sup>り、繩<sup>なは</sup>ときほとけば雪<sup>ゆき</sup>の谷<sup>や</sup>は、其<sup>その</sup>儘<sup>まま</sup>首<sup>くび</sup>にしがみ付<sup>つき</sup>き、詞<sup>ことば</sup>  
 「覺<sup>かく</sup>悟<sup>ぶ</sup>故<sup>こ</sup>とは云<sup>い</sup>ひながら、いとし可<sup>か</sup>愛<sup>あい</sup>い姉<sup>あね</sup>弟<sup>てい</sup>に、嘸<sup>さぞ</sup>や心<sup>こころ</sup>が殘<sup>ざん</sup>るである  
 魂<sup>こん</sup>魄<sup>ぱく</sup>去<sup>く</sup>らずば今<sup>いま</sup>一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>、物<sup>もの</sup>云<sup>い</sup>てたべ孫<sup>まご</sup>市<sup>いち</sup>殿<sup>でん</sup>、我<sup>わが</sup>夫<sup>おつと</sup>のふと押<sup>お</sup>し動<sup>うご</sup>かし、

盡ぬ名残の百千行、聲を限り泣き叫べば、詞、其歎きは理りながら、主君へ忠死の倅が功し、出かしをつたと譽るやす、親が心を推量せよ、不便と斗り詞數、云ぬ心のせつなさを、思ひやつたる雪の谷が、正体涙の聲を上げ、詞家を忘れ身を忘れ討死するは武士の習いと覺悟しながらも、得諦ぬは女だけお赦しなされて下さりませ、長い別れとぞらぬ子の常の遊びか何ぞの様に、親の首をばむごらし、詞切が手柄に成るといふ教は外に情ない、いかなる宿世の報ひぞとくどき立てたる恩愛の、心はひとつ重成も瞬き繁くばら〜、涙は雨か夕雨の車軸を、飛す如く也、折しも吹來る風に連れ響く貝鐘責鼓、又も敵や寄くるかと、驚く雪の谷騒がぬ老人、思ひがけなくかしのより、詞、足利の正統たる慶覺君を御迎ひの爲、中川清秀參上せりと呼ひり〜、入來る清秀喜多、頭はくはつとせき立

ち、詞、和議を破りし無道の春長、其祿を喰中川瀬平、納過ぎたる上下衣服、御迎ひとは何のたは言、一旦の憤りは尤至極此度の合戦は御舍弟春孝殿、事を計りし禮を亂す、去によつて眞柴久吉、内意をもつて立越しは密に都へ供奉せん爲、早御用意と云せも立せ、詞、逆賊光秀が爲に自滅せし春長父子、知るまいと思ふかや、石山方に、名を得たる鱸喜多、頭重成眼は日月、及ばぬ事をときめ付くれば、清秀猶も詞をつくし、詞、成程推量の如く當月二日、都本能寺において主君の横死、愁ひに沈む我々、偽りの有るべきや、取分け子息孫市殿、死を以て久吉殿へ願ひの一條、今より一子重若丸父の忠義を頭に戴き、二代の鱸孫市と名も改むる両家の和睦、詞、慶覺君の御本願照すも法の道廣く、やがて出目たき榮へをと情の詞に疑念も散じ、誤つたり〜、詞、斯程厚志の眞柴中川、倅が願ひ我君の、法



の門出一時に開け此上もあき我悦び、こゝ嫁女、孫が手柄は二代の忠臣歎きの中の悦びと、舅の詞聞に付け、いと涙に雪の谷がいらへも更に泣斗、早御立の刻限と追ふ、警固の諸軍勢、見るより重成手を打て、詞萬事に馴し清秀殿、ハテ我君へ此様子申上んと立上がれば、イヤ聞迄もなし、とくより慶覺是に有ると、まづくと立出給へば、はつと恐るゝ二人の勇士、慶覺君は御衣の袖まぼりたまひていかに旁、詞孫市が忠死により万死を出しも佛の恵み、久吉が情の計ひ、又清秀とやらんが志し過分至極とのたまへば、清秀おほも敬ひ深く、詞「有がたき君の御誼、此上は御心置きなく早鶏鳴に程近し、いざ御發駕とすゝめに君は、おり立給へば、詞暫く、御門出を壽きの孫、めが一さし、御上覽に入れ奉らん、嫁女、常々教へし扇の一手早く、くと舅の詞、涙ながらに、取上ぐる、鼓のしらべ、重

若が、詞祖父様、謠をうたふてやと、扇をしやんと、身の備へ、あら目出たや末廣の、君の榮へは萬々歳と祝しけり、拍子につれて稚子のかなで、祝する末廣の、其一曲は末の世に、名をどいめたる鱸のおどり、因縁斯としられたり、いざ御立ちと清秀が、詞にくり出す、行列の、おさへは二代の鱸孫市、武士の鑑とある鐘の音もろどもにわけて行、夜もしらくと白鷺の森をはなれて、飛びこふも、君のさかへを白鳥の、神の應護と勇み立ち都の空へと「供奉しけり

繪本太功記

○六月八日の段

あはれひべし、英雄の武將及の露と消て行く、内大臣春長公けふ一  
七日の大法事と老若男女わがちなく、参詣群集を當にして見せ物、  
輕業力持戰國の世も下この、身過にかはりなかりける、所の百姓引連  
てのさく来る陣張甚助、茶やが床几に腰打かけ、詞庄や太郎作と  
やら、此度尾田春長の法事は、主人武智左馬介様の御差圖、情を以  
て萬事御宥免有れば、付上がりおした百姓共、誰が赦して、輕業じ  
やの、曲持のと仰しいふるまひ、外は格別、當村は此陣張甚助が  
支配、立ふとふせふと身共次第、小家かけ茶やに至る迄、今日中に  
取拂へど、主の威光に肩ひぢはり、さも大へいに罵れば、庄や太郎作

わたしをかき、其お腹立は御尤でござりますれど、又してもく、  
 才くわめで村は亂が騒、此頃武智光秀様、將軍とやらにお成りな  
 され、少して、近邊は穩、其悦びの參詣群集、せめて四五日御用  
 捨をと、言つ、腰の早道より、取出す小錢茶碗にうつし、お一つと  
 差出せば、手に取り上て悔りし、にらんだ眼はとこへやら、くわらり  
 とかはるからくり的、何庄や、何かいやい主人光秀公  
 が天下をしろし召、其御悦びとあれば苦しふまい、輕業成りど  
 唐の芝居なりと勝手次第、拙者元來茶が好だが、大服にしてかへて  
 もくれる氣はないかと、肩からはへた、爪長代官、百姓共は口揃へ  
 何何が扱、なんばいありと御遠慮なしに、おかへなされて下さ  
 りませ、然らばさう今一ばい所望と差出され、めい、紙入  
 巾着を、さらへて漸八分目、些少ながらと差出せば、是はく、重

この御馳走、いやもふ此お茶さへ下さらば、少くは拙者の天窓で、  
 土佐踊なされても苦しからず、用事あらば承らん、必心置れおど欲に  
 目のないにこく、笑顔、としてやつたと百姓共、庄やを先に立上り  
 又もや御意のかはらぬ内、代官様へ差上る、出端の錢をもふけふと  
 挨拶そこく、立歸る、跡に甚助只一人くゆらす、煙草のけむりよ  
 り、胸に思ひのたへ間なき、おこぶは後にもぢくうぢく、  
 からふと立上り歩みか、ればこらへ兼、申くと呼かれば、甚助  
 あたりを見廻して、何心得ぬ、柳の小陰より申くと呼かけるは、  
 夜たかさなかいな、いさど走り出、はづかしそうに縫り付、い  
 はんとすれど赤らむ顔、甚助はためつすがめつ、おこぶが姿を眺め  
 入り、見れば本肉の仕事盛り、身共に取付さこだわるは、子細ぞあ  
 らん物語れ、ついにまみへぬげんざい殿と、いはれて漸顔を上、

三ついに、見ぬとは聞へませぬ、去年のさつきの夕まぐれ、道頓堀のあら茶やで、思ひ初たが縁のはし、丸寐の、ぼんやは丸清の二かい、千年も万年も、かはらぬ契り龜竹のふし、迄がなへる程、心よかつた床の海、音はぎしく、岸本や人の噂に鳴戸やを、ほんに嬉しの森新で、わしや悦んでゐる物を、夫におまへはあげ物やの荷箱か大正の鰻の様に、ぬらくらとしたぬめた様、忘れゐるとは、餘りも、聞へぬわいなと取り付て恨の尺をくゞき立て、すゝり上げたる有様は、達摩の畫像にのら猫のろばへかゝりし如く也、甚助道理と脊撫さすり、詞一と心に覺の合紋、顔見忘れたは悪るかつた、幸ひおれも徒然の砌、ア、水茶やへアおじやといはれておこぶもどつく、渡りに船と帆柱を、かゝへて戀の港入、打つれ立て歩み行、流るゝ音の水さへも、物騒がしき戰國に、行儀亂さぬ、生立ちは、

武智が一子重次郎人目を忍ぶ深編笠松原傳ひに歩み來て、有合床几に腰打かけ、甞、思ひ廻せば恐るしき世の亂、さのふの君臣はけふの怨敵、親ハ子を討ち子は親に、刃を合す修羅の巻せひもなき世の有様と暫し思に惱けり、漸く心取直し、父光秀が刃にかゝり空しくならせ給ふたる、春長公の靈前へ、御許容なく共後世の爲、イテ拜せんとさしかゝる、道をさへぎる陣張甚助、家來引具し大音上、甞、主殺しの武智が倅とと動くな、うぬが家來と偽し某こそ眞柴方、久吉様への奉公始腕を廻せとひしめけば、ハ、ハ、久吉方へうら切りの二た股武士の甚助め、腕立して怪我まくるなど、股立取て身構へたり甞、ちよこごいな小わつばめ物ないはせず討取と、いふより早く一同に切てかゝりし刃の稻ま、暫し時をぞ移しける、いらつて切り込甚助が刃物からりと打落し、付入るさそく重次郎、切伏しくといめの刀、

相人あければ是迄と衣紋、つくろい刀を鞘、納る不敵い重次郎、是より直には、様の、御居隠所へ發足し、此身の出陣お願ひ申、敵のやつ原かけ立、なき立て寄手を惱まし、骸は修羅の巷にさらし、武士の本意を達せんと勇立たる若木の花、あたら盛りの春も見ぞ憂を都の假住居跡に、見あして

# 繪本太功記

## ○六月九日の段

徳は咎徹に勝ち仁は凶邪を除くとかや、されば眞柴久吉中國の大敵を攻討んと水をもつて手をぬらさず忽ち和睦相調ひ、大物の浦に着陣あり武名の程を類ひなき、加藤正清進み出調信長と云ふ鬼の再来と、おぢ恐れし春長公を討取つたる逆賊の武智光秀、一時も早く都に責入り、ひねり殺すが君へ追善、早御用意とせり立れば、久吉莞爾と打笑ひ詞今に始め正清が勇言、心地よし、去りながら此久吉中國に發向せば、都に足を入れぬ内伏勢を以て討取らんと、武智が結構顯然たり、うかつに上京なすときは過つて死地に入らん、必油断致すなど、軍慮にさとき久吉が詞にあつと諸軍勢、英智を感ず

る斗也、折ふしひよか／＼濱傳ひ、藪ふと片手に百姓長兵衛、旅僧  
 一人引連れて咄し交くり行過る、軍兵共は聲をかけ、詞「ヤア、土民蝸坊  
 主、真柴筑前守久吉様の御前ども憚らずのさばりあるく横道者扣へ  
 おらふと咎められ、ア、そんなら久吉様はうここにござるか、お坊爰じ  
 やとやい、ヤレ、嬉しや／＼、ア、一ぶくしませうと藪ふとどつさり高め  
 ぐら、詞「ヤア、くまだどんざいなうじ虫めら、ア、い／＼其様にけん／＼云  
 んすな、久吉様のね目にかゝつたら、さつぱり譯が分る物じや、ア、  
 お坊、成程左様、大坂今里村の長兵衛、江州の観音寺の僧献穴が参  
 りましたと、おつしやつて下さりませ、ア、長兵衛でもけれん穴でも對  
 面なさる用事はない、さり／＼立てと争ふ軍卒、真柴久吉御聲かけ  
 詞某に對面せんとは仔細ぞ有ん、是へ通せと御仰、ハッと思れて兩人  
 を君の御前にいざなへば、久吉二人を見下し給ひ、詞終に見馴ぬ其

方達、仔細いかにと有りければ、ハ、ア、扱も物覺のわるいお人、わた  
 しを見違へてござるからの、ア、ア、いつやらの事有た、今川とやら  
 庭訓とやらいふ大將に負つしやつて春長様、と二人連でこちらの内  
 へ逃げ込しやつたを、お世話申た今里の長兵衛でござりますはいの、  
 ア、愚僧は前方江州の山寺観音寺の住職致しおりました時、岸田村  
 の百姓の息子岸田太吉といふ者を私が小性にして置きました時にあ  
 なたがお立寄り遊ばし、其小性に御茶を汲したらお目にとせり、  
 奇麗な小性じやこちへおこせとおつしやる故、二言となしに若衆を  
 献じた献穴と申者、様子有て只今は今里村に佗住居、餘りおなつか  
 しいやら又はお願ひの筋も有り、わざ／＼是なる長兵衛殿と同道で  
 参りしと、高座馴たるしら聲はり上げ、汗押拭ひ語りける、久吉は  
 打らなづき、詞「成程聞ば一と覺の有る事、兩人とも無事で重疊、ア、

我達が願ひの筋は、アイヤ外でもござりませぬ、知ての通り本能寺で春長様をころりと云した武智光秀、さのふからおらが在所へ陣を取先手の衆は京街道に出張してお前様を殺すとの謀事憎さも憎し、お前様のお前様、武智に討すは残念など此お坊との咄し合、そこでおらが一生にない智慧を震ひ出し、お前様をうつとおらが在所へ連て逝で、思ひがけなふ光秀めをころりと云してこまそふと、わざ／＼迎ひに來ましてごんす、サア一時も早ふ用意して武智を討取る魂膽さしやませ、ほんにまだ忘れた事が有るはい久しぶりでお目にかゝつた土産は是と藁ふごよりこて／＼取出す瓜二つ、コレ是はおらがわけ地に出來た真瓜うり、切てあがつて下りませと、自慢らしげにさし出せば、ア、明地に出來しを切て喰とは幸先よし満足／＼、殊更汝が光秀を手引して討せんとは天晴忠臣出かした／＼恩賞褒美は兩人

共、望に任せ得さすべしと仰せに悦ぶ兩人がり、勝色見する味方のどよみ、皆勢ひを添にける、かゝる折りしもかたへにならふいな村より、関を作つて武智の軍卒、久吉やらぬと切てかゝれば加藤正清、ア、ちよこ才あふ蠅共、目に物見せんと大太刀抜て切りかくるを受つ流して亂軍の、互に鎧を削り合、濱手の方へ戦ひ行、兩人は立つ居つ、こりやゑらい大騒動怪我のあい内久吉様、ア、くござれと先に立、歩む兩人明智の久吉出行僧を引戻し、ぐつと一しめかたへに投退け、ア、百姓長兵衛とは偽り、誠は武智光秀の舊臣四王天田島頭といまれやつと聲かけられ頭巾かぶりぐつと詰かけ、ア、道の久吉よく察した、うぬを偽りおびき寄せ討取らんと計りしに見顯はざれて残念至極といふより早く藁づとに、隠せし業物抜放し、久吉目が切付くれば、ア、遁すなど軍兵共、群り寄て突かゝる、鎗の穂先は

まの薄、なき立てく切結ぶ勇猛不敵の四天王、乾達婆王の荒れたる如く突伏せ切伏せかけ上れば、あしらい兼たる眞柴方途を失ふて見へにける、久吉も心を配り味方の勝利覺束なしと、有合ふ僧の袈裟衣手早に取て我身に着し、馬にひらりと飛乗て、濱手の方へ只一騎馳出す向ふへ四天王、夫と見るよりくり出す穂先、得たりとかはし一さんに駒を早めてかけり行、ヤアきたなし返せ猿冠者めと跡を、したふて一追て行、田畑あせ道嫌ひなく追かけ追詰四王天額に無念の息煙立て勢ひ込でかけ廻る、遙に夫と加藤正清踊上つて田島頭、観念せよと切込太刀、心得たりと渡り合、双方劣ぬ雄猛力火花を散して戦ひしが、いらつて打込正清が凡人ならぬ奇代の切先、あしらひ兼て四王天漂ふ所を切り伏せく、主人の安否氣遣ひと跡に、見なして走り行、さしも勇氣の田島頭、數ヶ所の深手によるぼひく、

圓チ、殘念や、斯迄手に入る眞柴久吉討もらし夫のみならずむざくと、名有る勇者の首をも取らず討死するが口惜やな、思ひ廻せば廻す程、運の強き猿冠者め、此土をばづれいつか又さやつを討取期や有ん、無念くと云死に、爰に名のみを残したる田島頭が身の果ぞ哀ありける



繪本太功記

○六月十日の段

圓なむ妙法蓮華經はふれんけいぎやうくくく、御法の聲みのりも媚まよめさし尼あまが崎さきの片邊かたはたり、  
誰住たれすじ家いへといふ顔かほも、おのが儘まなる軒のきのつま、あたり近所ちかところの百姓ひやくしやう共、  
茶碗片手ちawanかたてに、高咄たかばなし、圓なふ婆様おばさま、こな様も、見た所みたところが、上方かみかたで歴々れききの  
御衆みしゆそらなが、何なんの爲ために面白おもしろふもあ、此在所こゝへはござつたといの、  
ア、レ、甚作しんさくそりやいやんな、京の町は武智ぶちといふ悪人あくにんが、春長様はるながを殺ころ  
して大騒動おほさわぎ、大かた又下へ下つてゐやしやる久吉殿ひさきちんが戻もどつて来て、武  
智ちと是非せひに一合戦かずせんなけりや濟ぬはいのふ、うんちら年寄としよりはうかく  
京の町には居られぬとかくおぶなげのないやうにこんち在所へ来て  
ゐるが大でさく、時に近付ちかがてら妙見講めうけんかうを勤つとむるとはよい手廻てまはし、

大きを馳走に逢ました、是から随分お互に御心安ふいたしませう、  
さく逝ふと口々に、云たい事をたくしかけしやべり廻つて歸りける、  
老母はつとく門送り庭の千草に打水もたもつ葉毎に、風薫る軒を  
目當てに、くる人は武智が閨に咲花の操の前へ家來を遠ざけ、嫁の  
初菊伴ふて窺ふ切戸の庭前に花に心を、養ふ老女、夫れと見より手  
をつかへ、詞後室様の見舞として、只今參上いたせしと慇懃に相述  
る、詞に老女は打笑みて、詞、珍らしい嫁女孫嫁、はるくの道よ  
ふこそく、去ながら倅光秀、當月二日本能寺にて主君を害せし無  
法者、同じ館に膝ならぶるも、先祖の耻辱身の汚れと、館を捨て此  
在所へ身退さし此婆を、詞見舞とはおこがましい、善にもせよ惡に  
もせよ、夫に付が女の道、操の前は武智十兵衛光秀が妻、そなたは  
又孫の重次郎光慶が嫁でないか、生死分らぬ戰場へ、赴く夫を打捨

て浮世を捨てた姑に、孝行盡すは道が違ふ、詞妻城に留つて留主を守  
るが肝要ぞや、さやもめ暮しの樂みには、夕顏棚の下涼、捨べき物  
は弓矢ぞと、言放したる老女の一徹、跡は詞もなかりけり、常の氣  
質と、さからはず、詞いか様後室様のかつしやる通り、此様に只お一  
人ござつたら、何もかも氣散じで、第一はお身の養生今から私も  
初菊も後室様のお傍に居て、飯も焚たり茶も涌し、お宮仕をせうろ  
いのだ、有合前垂箔の上に引しめ茶釜の傍、端香の籠る姑の、しぶ  
く機嫌を取兼ねる娘心に初菊も、さよ濟事か濁り井の、深き寄縁の  
釣瓶繩、水くみ上んと立寄れば、詞、コレ嫁達、シテ孫重次郎は、城に  
残つて居召さるかさればでござります、重次郎が願ひには、とふぞ  
けふの軍に高名手柄が願はしたいと、父上迄は願ひしかど、婆様の  
お赦しなきに出陣するも本意でなし、母に取次してくれとくれと

の願ひ故、餘り健氣さ祖母様おばあさまに御機嫌ごきげんの程いかゞと窺うかがひに参りま  
 したと語る内、老母は涙をばらゝと流し、詞ヲ、うるさの嫁よめが物語  
 り主を討うたる逆賊さかぞくの邪非道よこしまいたうの軍の評定、聞がいやさの此住居このすまひ又孫を  
 譽ほるではなけれ共、非道ひだうな倅こ光秀が子に、重次郎といふ武士が、生  
 れてくるといは是も因縁いん縁悔くんで返らず、戰場せんぢやうの事聞きたふない、いや  
 く情なさけの浮世うきよやと、無量むりやうの思ひ百八の、數珠じゆずつまぐつて居たりけ  
 る折おりふし表へ草鞋わらぢかけ、風呂敷ふろしき背せにいつさせさ蛙飛かむつこひこむちの込道野邊のべの清水、  
 結むすばん夏の旅、西行もどきの僧一人門口かどぐちに立休たやすらひ、詞諸國しよこく執行しゆけうの  
 一人旅ひとりたび、近頃申兼ちかごろましかみたれと御宿ごしゆくの報謝ほうしゃに預あづかりたし、押付けながらと云入  
 れる、聲こゑを老母が聞取きて、詞見苦みくるしうでござりますれと、ね心置こころなふ御  
 一宿ひとしゆく、夫は千万かたじけな忝かたじけない、左様さやうならば御遠慮ごえんりょなしに御免ごめん  
 打うちかくれば二人の女、草鞋わらぢの紐ひもを解とかくれば、詞ア、勿體うたがいないく構かま

ふて下くださりますな、旅仕付けた坊主ぼくしゆの氣散きさんじ、木納屋ななやの隅すみでもつひ  
 ころり、蚊屋かやも蒲團ふとんも入ませぬ、ね心遣こころひ御無用ごむじようと、詞半へ表口、  
 人目ひとめを忍しのび只一騎ひと、窺うかがひ立聞武智光秀、心得こころがたき旅僧たびそうと、生垣いきがき押  
 分けわけさし覗のぞき、思はず見合す母の顔かほ、老母は何か心に點うらづき、詞ヲ、わ  
 したした事ことが心の付かぬ、コレ御出家ごしゆつげさま様、此板圍このいたがこひが則ち風呂場、水  
 は幸さいひ汲ひで有、つひばやくともやして、暑い時分あつじや行水けらみして休やすん  
 で下くださりませ、婆おばも跡あとで相伴せうばんしませう、ア、夫それには及びませぬと、  
 相伴せうばんと有ば涌わかしませう、そんなら御免ごめんなされませと、包引つひさげ氣散きさん  
 じに湯殿ゆどのをさして入いりける、味方みかたの軍卒ぐんそつ両手をつき、詞御子息ごしよ重次  
 郎らう、光慶みつよし様後室ごむすむ様に御願ごねがひの筋すぢありと、只今ただいま是へ御越ごこしと、いふ間程まじあ  
 くしづくと、家來けらいに持せし櫃ぶ籠かご、かき入いらせて打うち通り、詞コトヤ者  
 共ともうち達たちは用事もちごとはない陣所せんしよへ早くとおつ立たり、威儀ゐぎを正ただして兩手

をつき、は、さま 祖母様を以て、御願ひ申せし出陣、御聞届下されなば、武士の本意と、重次郎思ひ込で願ひける、老母は見るより機嫌顔、めづ 詞、珍らしい重次郎、出陣の願ひとな倅を見限り此所へ身退さしに叮嚀願ひの筋最前嫁女にくはしう聞きました、逆も出陣仕やるなら、祖母が願ひは此初菊、今宵此家で祝言の、盃仕てから門出仕や、何と嫁女嬉しいかと老の詞に初菊は、飛立斗氣もいそぐ、心の悦び穂に出る、顔は上氣の夏楓色も媚く斗也、只黙然と重次郎、けふ初陣に討死と覺悟極めし此體、お暇乞に参りしと、しらせ給はぬ悲しやと涙呑込忍び泣操の前も立上り、祖母様の御機嫌のかはらぬ内にかための盃、詞、それ、孫も大かた心せき、操は九献の用意仕や、重次郎が初陣の、鎧の役はす々に花嫁、三國一の悲しみと、しらぬ白齒の孫嫁が、手を引連れて三人は、奥の一間へ入にけり、残る苔の花

一つ、水上かねし風情にて、思案投首しはる、斗、漸涙押といめ、おん 祖母様にもば、様にも是今生の暇乞、此身の願ひ叶ふたれば、思ひ置事更になし、十八年が其間御恩は海山かへがたし、討死するは武士の習ひと思し召分けられて、先立不孝は赦してたべ、詞二つには又初菊殿、まだ祝言の盃をせぬが互の身の仕合せ、わしが事は思ひ切、他家へ縁付して下され、討死と聞さらばこそ歎かん不便やと、孝と戀との思ひの海、隔つ一間に初菊が、立聞涙轉び出わつと斗に、泣出せば、はつと驚き口に手を當、詞、お、聲が高い初菊殿、扱は様子を、アイ残らず聞ておりました、夫の討死遊ばすを妻がしらいで何とせう、二世も三世も女夫ぢやと思ふてゐるに情ない盃せぬが仕合せとは、餘り聞へぬ光慶様、祝言さへも濟ぬ内討死との曲がない、わしや何ぼうでも殺しはせぬ、思ひ留つて給はれと縋り歎けば、詞

こゝろあたも武士の娘じやないか、重次郎が討死は兼ての覺悟、ば  
 い様に泣顔見せ、もし悟られたら未來永く縁切ぞやエ、サアとかふ云ふ  
 内も時刻が延る、其鎧櫃爰へ、く、ア、早ふ、時延る程不覺の元、  
 聞分けないと阿られて、いとしい夫が討死の、首途の物の具付るの  
 がどふ急がる、物ぞいのだ、泣く取出す緋威の、鎧の袖にふりか  
 いる、雨か涙の母親は、白木に土器白髪のは、長柄の銚子蝶花が  
 た首途を祝ふのし昆布結ぶは、親と小手脚當、六具かたむら三々九  
 度、此世の縁やわり小ざね、猪首に着なす鉄形の、あたりまはゆき  
 出立は、爽ありし、其骨柄、詞、適武者ふりいさまきし、高名手柄  
 を見る様な、祝言と出陣をいつしよの盃、く早ふ、目出たいく  
 嫁御寮と、悦ぶ程彌彌増名殘こんな殿御を持ながら是が別れの盃か  
 と悲しと隠す笑ひ顔随分お手柄高名して、せめて今宵は凱陣をと、

跡は得いはすくいしばる、胸は八千代の玉椿、ちりてはかきき心根  
 と、察しやつたる重次郎包む涙の忍びの緒、しぼり、かねたる斗也、  
 哀を、爰に、吹送る、風が持くる攻太鼓、氣を取りなをしつゝ立上り、  
 闘いづれもさらばと云捨て、思ひ切たる鎧の袖行方しらす成にけり、  
 ら悲しやと泣入る初菊、母も操も顔見合せ、詞ば、様嫁女可愛やあ  
 つたら武士を、むざく殺しにやりました、初菊、重次郎が討死  
 の出陣とは知ながら、なま中留て主殺しの憂死耻をさらそふより、  
 健氣な討死させん爲、祝言によそへて盃をさしたのは、暇乞やら二  
 つには心残りのないやうと思ひ餘つた三々九度、ば、が心のせつあ  
 さを推量仕やと斗にて、始て明す老母の節義、聞く初菊も母親も一度  
 にとふと、伏まろび前後不覺に泣き叫ぶ、襖押明け何氣なふつか  
 く出る以前の旅僧、詞、くかみ様、風呂の湯がわきました、とな

光ぞおは入りなされませと、いふにこなたは泣顔かくし、詞ヲ、それ  
 は御苦勞ながら年寄りに新湯は毒、跡は若い女子共、お先へ御出  
 家から、いかさま湯の辭義の水とやら、左様ならば御遠慮なし、ね  
 先へ参ると立上れば、三人は涙押包奥の佛間と湯殿口入や、月も  
 片庇、爰にかり取真柴垣、夕顔柵のこなたより、顯れ出たる武智  
 光秀必定久吉此内に忍び居るころ究竟一、只一討と氣は張弓、心は  
 やたけ藪垣の見越の竹を引そぎ鎗小田の蛙の啼音をばとめて敵に  
 悟られじと、差足拔足窺ひ寄、聞ゆる物音心得たりと突込手練の鎗  
 先に、わつと玉ざる女の泣聲、合點行きて引出す手負、真柴にあら  
 で眞實の、母のさつきが十轉八倒、詞ヤアこは母人か死あしたり、殘  
 念至極と斗にて、道の武智も仰天し只忙然たる斗也、聲聞付けてか  
 け出る操初菊諸共に、母様か情けあい、此有様は何事と絶り歎け

ば目を見開き、「罰歎くまい〜、内大臣春長といふ、主君を害せし  
 武智が一類、斯成り果るは理の當然、系圖正しき我家を逆賊非道の  
 名を穢す、不孝者共惡人共、譬がたなき人非人、不義の富貴は浮べ  
 る雲、主君を討て高名顔、天子將軍に成た逆、野末の小家の非人に  
 も、おどりしとはしらざるか、主に背かず親につかへ、仁義忠孝の  
 道さへ立ば、もつそう飯の切米も、百万石にまざるぞや、儕が心只  
 一つで、あるしは目前是を見よ、武士の命を斷及も多いに此様を、  
 引そぎ竹の猪突鎗、主を殺した天罰の報ひは親にも此通りと、鎗の  
 穂先に手をかけてゑぐりくるしむ氣丈の手負、妻は涙にむせ返り、  
 胸に見たまへ光秀殿、軍の首途にくれ〜もれ諫の申た其時に、思  
 ひ留つて給はらば、斯した歎きは有まいに、しらぬ事とは云ながら  
 現在母御を手にかけて、殺すといふ何事ぞ、せめて母御の御最期

に善心に立歸ると、たつた一言聞かしてたべ、拜むはいのと手を合し、いよめつ泣つ一筋に夫を思ふ恨泣、操の鏡くもりあき涙に誠わらはせり、光秀は聲わらへげ、詞「アちよこざいお諫言立、無益の舌の根動かすな、意意を重ねる尾田春長、勿論三代相恩の主君でなく、我諫を用ひずして神社佛閣を破却し、惡逆日々に増長すれば、武門のならひ天下の爲、討取たるは我器量武王は般の紂王を討、北條義時は帝を流し奉る、和漢俱に無道の君をしひするは、民を安むる英傑の志女童のしる事ならず、すざりおらふと光秀が、一心變せぬ勇氣の眼色、取付鳥もなかりけり、折しも聞ゆる陣太鼓、耳をつらぬく金鼓の響さあはやと見やる表口、數ヶ所の手疵に血は瀧津瀬、刀を杖によろばひく、立歸つたる武智が一子、庭先に大息つき、詞親人是におはするやと、いふも苦しき斷末魔、見るに驚く母親より、

娘は傍に走り寄りのふいたはしや重次郎様、ば、様といひお前迄此有様は情ない、ね心慥に持てたべやいのくと取り付て介抱如在泣斗光秀わざと聲わらへげ、詞「アア不覺なり重次郎、仔細は何と、様子はいかに、具に語れと呼はれば、はつと心を取直し、詞親人の差圖に任せ手勢すぐつて三千餘騎、濱手の方に陣所をかため、今や歸國と相待所に、敵はそれ共白浪の、櫓を押切て陸地に漕付、詞「追々都へ馳發る、眞柴の軍勢ござんされと、関をつくつて味方の軍兵縦横無盡になぎ立れば、不意を打れて敵は廢亡狼狽騒ぐを追立追詰、爰をせんぞ、戦ふ内、後の方より大音上、眞柴筑前守久吉の家臣加藤正清是に有、逆賊武智が小わつば共、目よ物見せてくれんすと、いふより早く太刀抜かざし、四角八面に切り立られ、瞬間に味方の軍卒、殘らず討死仕り、無念ながらも只一騎立歸つて候と、息繼あへず物語

れば、光秀怒りの髪逆立詞、言がひなき味方のやつ原、四天王田  
 島頭、さん候四王天は、目ざすは久吉一人と昨朝よりの一騎かけ、  
 亂軍なれば、生死の程も、慥にうれと承はらず、親人の御身の上心  
 にかしり候故、未練にも敵を切抜、是迄落延歸りしぞや、此所に御  
 座有ては危ふし、一時も早く本國へ、引取給へ早く、と、  
 深手に屈せず爺親を、氣遣ふ孫の孝行心、聞に老母はせと兼て、あ  
 れを聞き嫁女、詞其身の手疵は苦にもせず、極悪人の倅めを、大  
 事に思ふ孫が孝心、光秀、子は不便にないか、可愛とは思はぬか  
 やい、儂が心只一つで、いとし可愛の初孫を忠と義心に健氣ある、討  
 死でもさす事か、逆賊不道の名を穢し、殺すは何の因果ぞとせぐり  
 くるしき老の身の、聲聞付て重次郎、詞、そんならばは様には、御  
 生害遊ばしたか、今生のお暇乞、今一度お顔が見たけれど、もふ目

が見へぬ父上、母様初菊殿名残惜やと手を取て、妹背の別れ愛着の  
 道に引るゝいちらしさ、母は涙に正体なく、討死するも武士のなら  
 ひといへと情ない、詞十八年の春秋を刃の中に人とあるいつ樂しみ  
 の隙もなふ弓矢の道に日をゆだね今朝の首途の其時にも母様けふの  
 初陣に、適高名手柄して、父上やば、様に譽らるゝのが樂しみと、  
 につこと笑ふた其顔がわしや幻にちら付て得忘れぬとくどき立、く  
 どき立つれば初菊も、ほんに思へば此身程はかあゝ者が世に有ふか、  
 とけてあふ夜のさぬくも永き名残の云號二世を結ぶの枕さへかは  
 す間もなふ此様な、悲しい別れをする事はどふした罪か情ない、わ  
 たしも一所に殺してたべ死たいわいなと身をもたへ、互に手に手  
 を取りかはし名残涙の暇乞、見るに目もくれ心さへ母も老母も聲を  
 上わつと斗に取亂せば、道勇氣の光秀も親の慈悲心子故の間、輪廻



の継にしめ付けられこたへ兼てはらく、雨か涙の汐境浪立ち騒ぐ如くあり、又も聞ゆる人馬の物音、矢叫びの聲、喧く手に取如く聞ゆれば、光秀聞よりつゝ立上り、詞、物音は敵か味方か、勝利いかにと庭先の、すね木の松が枝踏しめ、よぢ登り、眼下の村手を屹度見下し、詞和田の御崎の弓手より追つ、いく數多の兵、問近く立たる魚鱗の備へ、千生瓢の馬印は、疑もあま真柴久吉、風をくらつて此家を逃延、手勢引ぐし光秀を討取術と覺へたりと、いふより早くひらりと飛下り、草履摺みの猿面冠者、いで一ひしぎと身繕ひ、勢ひ込でかけ出せば、詞、武智光秀暫く待、真柴筑前守久吉對面せんと呼はつて、三衣にかはる陣羽織、小手脚當も優美の骨柄ゆうせんとして立出れば、光秀見るより仰天し、かけ戻つてはつたとにらみ、詞、珍らし、真柴久吉、武智十兵衛光秀が、此世の引導

渡してくれん、觀念せよと、詰寄る光秀、中を隔つる老鳥の、子故に手疵屈せぬ老女、なふ久吉様、詞、我子にかはる此母も、天命遁れぬ引そぎ鎗、作りし罪の万分一亡ぶる事も有ふかと、思ひ餘た此最期、武智が母は逆礫に、かゝつて無慚の死を遂しと、末世の記録に残してたぐ、それもやつぱり倅めが、可愛さ故の罪亡し、詞、うるさの娑婆に残らんより、孫といつしよに死出三途、ハ、わたしもお供致します、いづれもさらば、ねさらばと、未練残さぬ武士の、花も實も有る此世の別れ、今どはかなく成にけり、操の前も初菊もさらしに詞も出ばこそ、あへ亡骸を押動かし、天にあこがれ地に伏て歎く心ぞいぢらしき、哀を餘所に真柴久吉、光秀に打向ひ、詞、俱に天を戴かぬ亡君の吊ひ軍、今此所で討取ては義有て勇を失ふ道理、諸國の武士に久吉が軍功をしらさん爲、時日を移さず山崎にて、勝負の

雌雄を決すべしかいかに、道の久吉よくいふたり、我も惟任將軍と勅許を請し身の本懐、一先都に立歸り京落中の者共へ、地子を赦すも母への追善互の運は天王山洞が峠に陣所を構へ、只一戦にかけ崩さん、首を洗つて觀念せよ、何ささく、たどへ項羽が勇有共我又孫吳が秘術をふるひ、千變萬化にかけ惱まし、勝鬨上るは瞬く内と久吉が詞はゆるがぬ大磐石忽廻り小栗栖の、土に哀を殘すとはしらすしられぬ敵味方、にらみ別るゝ二人の勇者、二世をかため別れの涙かゝれとてしもうば玉の、其黒髪をあへなくも、切拂ふたる尼が崎ぼだいの種と夕顔の軒にさらめく千生瓢箪、駒の嘶迎ひの軍卒、見渡す沖は中國より追々入來る數方の兵船、威風りんくゝりんせんたる眞柴が武名假名書にうつす繪本の太功記と末の、世までも「殘しけり」

繪本太功記

○六月十一日の段

龜家來共やい、彌明日は山崎にて晴軍、時に抜目ないは久吉殿、敵方の間者又怪しき曲者も有んかと、此赤山與三兵衛へ密々の申付け汝らもぬかりなく、若や怪しき者も有らば、男女に限らずからめ取つて本陣へさし出せよ、褒美は急度後日に御沙汰、必せぬかるな合點かど、示し合せて主従は、左右へこそは別れ行、身は世を忍ぶ、養笠にやつす姿も柵が、夫の詞守り立てし、主君の種の音壽丸、いたはり傳さ參らせて心ならせも夜の道、流れに、傳ふ淀堤、並木のかげに立ち休らひ、鶴、和子、遙の西に旗の手の、月に映じてきらめくは、山崎の御本陣、父上の御座所、わらはが夫政道殿も主君の

御供、翌は早々光秀様に御對面お嬉しうござりますかへ、詞ヲ嬉し  
 い、早ふおと、様に逢いたいけれども、どふやらねむたい、  
 と詞の内に、ふら、眠り、詞ヲ、道理でござります、大切の密事を  
 受けた俄の旅立、若や敵の間者に出合、御身の御難義有りもやせん  
 と、心は千々に誰有ふ、江州丹州兩國の御主、今では四海の御大將  
 惟任將軍の、御公達、あまたの從者引かへて從ふ者は此柵杖柱と  
 も思し召、御心根がおいどうしい、是といふのも父上の道に背さし  
 御企、たどへ望みは叶ふても、勿体ない御主君の、春長様に刃を合  
 はし、主殺しの大罪と、世の口の端に情ない、夫に連れたる我夫も  
 俱に汚名を下すかど、思へば悲しい、と人目をかければ聲上げて、  
 わつと斗に伏沈む心ぞ、思ひやられたり、立戻りたる赤山が夫と見よ  
 り相圖の呼子、友呼千鳥はら、と、顯はれ出し以前の組子、詞女

めやらぬと追取巻く驚きながら道の柵、音壽を圍ふてすつくと立ち  
 詞ヲ心得ぬ人との舉動、何者成るぞと咎むれば、赤山は大口明き、  
 何者とは舌長し、主殺しの光秀が一子音壽丸、軍の幸先久吉公へ差  
 出す、早く渡せとのしつたり、ホ、事れかしや、光秀公のお内に  
 て、人も知つたる松田太郎左衛門が女房柵、主なしの久吉殿、夫  
 れに隨ふそち達が、及ばぬ事と言はせも立てて、者共と赤山が下  
 知に従ひ一度に切てかゝるを事ともせず、右と左りにあき立つれば、  
 口程にもなき雜人原むら、ばつと逃散つたり、透を窺ひ後ろより、  
 切込む赤山早足の柵、ひらりとかはせば赤山が、首は前にぞ落にけ  
 り、詞ヲ、此際に音壽様、此場を早ふと、かい、敷く忠義一途  
 の女氣に、主君の若を伴ひて、定めなく、短夜に、心せかれて、た  
 どり行

繪本太功記

○六月十二日の段

誰を乞、鳴や稍に、から衣はつてと蟬の音を友と、世をいとふたる浪  
人の風雅を好む一かまへ、谷の流れも水無月の空半なる夕暮時遠寺  
の鐘のかうくと、兼ての願ひ有り磯海、深き思ひに柵が縁による  
べの舅の住家そこ爰とたどりくるく長崎稚子連て夜の道、漸尋ね  
あたりにも、家居なければ爰あらんと柴の軒端にぞみて、詞イのう  
音壽様、夫松田太郎左衛門殿の差圖を請て來事は來ても、つゝめには  
迄音信もせぬ親御の所、とふやら敷居が高ふなり、閃にくう思ひま  
すと、いへば音壽が打點頭、詞そあたが得閃らすはおれから先へ閃  
つてあらふと、何のぐわんせも上り口、いし申しを、まはにして、

関る物音何やらんと、納戸を出る妻の眞弓、顔見合して柵が手をも  
 ぎくど、詞、ほんに私とした事が、いかに舅君の所ぢや逆案内  
 なしに不作法千万、お赦なされて下さりませと、いへどこなたは  
 不審顔、圓夜に入て若い女中の子供をつれ、舅の所へ来たとは、此  
 母は覺へはござらぬ、成程く委細の譯を申さねばさう思し召すも  
 理りながら、私事は十三の時家出致されました、御子息宗太郎殿  
 の女房柵と申者、夫も今はれつさとした侍、名も改て松田太郎  
 左衛門と申まして夫はく適の武士をふど是迄の事ハ川へ流し、  
 元の親子に、さうりや云しやらいでも知れた事、元より氣に違ふて  
 家出したと云ふでもなし、生れ付て力強、草深い住居を嫌ひ、我ど  
 我手に家出した宗太郎、わしは明暮こがれて居ます、そして連れて  
 せれば夫婦の中に出來た子か、くこちへと嬉しさの、子には目の

ない母親が、悦ぶ中へ宗左衛門、刀片手にあゆみ出、詞お祖母何を  
 べりくおいやるぞ親を見捨た不孝の倅夫に連添ふ此女郎嫁なんぞ  
 とは穢らばしい、早立ち歸れとつかふとに、いふをおさへて、詞、  
 此夫は一途な思ひやう、毎日く壁訴訟、願ひの折も幸と、初めて  
 逢た嫁の手前、とふぞ了簡し中直りして下されと、いふも涙の種な  
 らん、詞、又してもく役に立ぬ倅が訴訟聞さたくないぞ、よい年  
 をして女房去るも世間の笑ひ、暇の代りぢや向後物は言んずく、早  
 く奥へお行きやれと、常の氣質のぢやかさには、詞はなくてまはく  
 ど、心「残して立て入、柵は氣の毒の中に願ひも言ひ兼て、俄に作る  
 輕薄笑ひ、詞、ほんにまわよしない事から御夫婦のおいさかい、  
 もふね腹立は重くの御尤じやがどふぞ夫の願ひ、則此子は主人と仰  
 ぐ光秀公の御公達音壽丸様、夫に付ての御訴訟と何か様子は白紙に

書を認めし願ひの一書、舅の前にもし置けば遺骨肉同胞の我子の手跡としぶくながら、手に取り上げて押開けば、様子いかいと氣遣ふ嫁、舅は猶も眉をひそめつづく讀も口の中、巻納めてにつこと笑ひ聞何事あらんと思ひしに、少し計りは待くさい所も有り出かすく、そんなら夫の願ひと申すは、成程大切の密事、其方はしるまい、倅が我への願ひといふは、此小兒、光秀此度當山崎に在いて合戦のいそむといへ共無名の軍、元より主殺しといふ大罪、天何ふ是を赦さん然らば十が九つ負軍と押はかつたる倅太郎、去るによつて、光秀が一子音壽丸我に養育を頼み、成長の後は出家ともあしくれよとの願ひ書又柵事は敵がた森尾茂助が妹に候へば是も親が手より返し遣はしくれよと有倅が文面と聞て恟り柵は膝摺寄て、聞、主君の若殿お預け申さん其爲にお詫の使ひ一つにはわたしにが身の上

兄様へ返してくれとは何の事、さういふ事とは露しらす舅御様へお詫して、嫁よとふせいら斯せいのお詞受て歸りなば、夫の悦び此身の手柄と悦んでゐる物を科もあい身を去らふとは、聞へぬ夫の心やど、くぞと歎くぞ道理也、聞、何れも歎くにや及ばぬ此宗左衛門も元は武士、亂れたる世を通れ、心を澄す茶道の樂しみ、折とは久吉殿の招きに預り咄しの伽、弓も引さかた眞柴へ心通はす某、大悪無道の光秀が種と有べ願ふてもないよき得物首打放し久吉公へ献ずるならば嘸悦び、飛で火に入夏の虫とは是ならんと、舅の一言柵が聞とり又も二度恟り、聞、ほんに親子とて餘りな情しらす獵人さへ懐へ入る鳥は助ける物たとへ此身は去られても、夫に立る心の潔白女でころ有松田が女房、主人の若殿めつたにお首は得渡さぬ、斯いふ内に片時も置さず事は成りませぬ、申若殿様、いさへせ給へと立寄

るを突退けし音壽丸小脇に引抱きはつたにらみ、詞龍の腮にかしりし小倅、連歸らんとは叶はぬ事、わるく妨げひるぐやいなや身の爲にならぬがや、元より夫に去られし此身、生て詮なき我命、ちつ共厭はぬくと、又立かゝるを面倒など老んの當うんと倒るゝ其際に奥の間さしてかけ入つたり、跡には一人柵が苦痛こたへてれき直り、詞、胸欲どもむごい共何に譬へん鼻君、何辨へも七つ子のね首を敵に渡さふとは、心は鬼か蛇かいのふ、たとへ此身はひしづくはに成る迎も、取かへさいで置べきかと、心を配る様先に落ちる一書は夫の手跡、詞柵殿へ光高より、最前の多の中に封じ込める此一書心ならずと封押切、詞書残す一書の事、やうらんなら夫太郎左衛門殿は討死の覺悟で有つたか、何にもせよと又取上げ今度の合戦主君光秀公主殺しといふ悪名、其罪遁るゝ事有るまじく

覺へし故其方を頼み親入へ若殿の義くれゝ相頼む事にし、又も明朝の戦ひに向ひし敵はそちが兄森尾茂助春久にしよし、元より討死の覺悟にしへば、我等が首は春久へ遣はしし、なれ共妹の縁につれ、用捨もしは、武門の中耻べき事にしへば是非なく暇遣はしし段、必老恨有るまじくいと、讀もをばらず立上り、詞こりや斯しては居られぬわいのふ、夫の最期は此曉、若殿の涉身の上奥へ踏込取返さふかゝくあれゝゝあの鐘八つの鐘、天王山へは一里の餘、夫の命も助けたしこりやとふせうくと、主と夫の身の上を我身一人に柵か立たり居たり詮方も、涙ながらに氣を取直し、詞何にもせよ是より直に天王山へかけ付けて夫に一言をうじやくと、帯引しめ常には弱き女氣も夫に立る真心の、くもらぬ鏡てる月に、照す道筋一さんにこけつまるびつゝしたひ行、山は血汐のから紅ひ敵も味方

も入亂れ、戦ひいそむ其中に、森尾松田が雌雄の争ひ、人ませもせずはつしく、切結びたる電光の、及の光り飛鳥のごとく鎧を削る其折しも、夫の生死いかゞと、氣は弓の女房柵武家の育のかいぐ敷、夫を思ふ一心に、木の根岩角厭ひなく登る、嶮岨も力草、足踏しめて難おくも、こまたの岡によぢ登り夫と見るより分け入て、こゝ待ても身を惜まず、さゝゆる女房突きのけて猶も付け入る太郎左衛門、互いに劣らぬ勇將猛將中にうろく詮方も、なぎさの小舟柵が、浪に漂ふ其風情、心も功に有合楯、切結びたる白刃のしづ、しつかとどいめ、闘て待て下さんせ、こゝ兄様茂介殿必ず早まつて下さんすな元より知た敵味方、討らうたるは武士の身の、常とは知て居ますれと相尋も多いに經同士、切つはつゝの争ひを、何と見捨て、置れふぞ、思ひとまつてと、歎さかこつを耳にもかけず

闘て義晴何を猶豫内證の縁は縁親子兄弟敵と、鎧を削るは武門の常、早く勝負を決せよと、云せも果すにつこと笑ひ、闘死人同前の政道我相手には不足なり、光秀が先途を見届け死る共遅かるまじ、妹がとむるを幸、此場を早く退けと聞よりくはつとせき立、闘て奇怪ある一言、弓矢取ては誰に恥べき事や有らん、女房が兄とは云さぬ、首討取て修羅の奴とあしくれんに、死人同前とは案外ありと居尺高、いかにやうに陳するとも、死色を顯はす汝が骨格、我に討れん心の覺悟、死人と云しが誤りかと、明察達はぬ一言は、胸に磐石現とも、心はやみの柵が、聲も涙にかきくもり、兄様のあの心ならどの様に思はしやんしても、所詮死れぬお前の命、とふぞ死さずに濟む事なら、千年も萬年も長生して、二人の中の、二人が中に預かつた、主人のお種音壽様の、行末も御無事を様に思案して下さりませ



申し申、夫婦と成て以來に願ひといふは是一つ聞届けてたべ我夫と、  
 妹が歎き道にも血脈の糸の亂れ口、涙呑込む義晴が心の内不せつな  
 けれ何思ひけん太郎左衛門鎧ぬぎ捨せつかと座し、詞實や名將の下  
 に弱兵なしと、通眼力森尾義晴、主家の無道を見限りて、死出三途  
 の先陣と覺悟極めし心の鐵石、死後に頼むは此女、又是迄音信せざれ  
 共、實父松田利休殿へ、預置たる彼若殿心を添てよき様に、頼み置  
 は貴殿一人、最早浮世に望なし急ぎ首討我存心、立さしくるも武  
 士の情、猶豫は返つて恨むぞと、言より早く持たる刀腹にがばと突  
 立れば、のふ悲しやと取廻り、歎く女房を取て引すへ飼サテ森尾、名  
 もなき士卒の手にかけんより、武士の情に我首を、受取くれよとさ  
 し付れば、世の有様とは言ながら、かばかり惜き弓取も、主家の  
 悪事は其身の不幸、残念至極と義晴が、是非も涙に立迫れば、愚か

く、死にのぞむは勇者の本義、骸は廣野にさらす共、名は千歳に  
 といまるころ、死しての悦び此上なし早く、く稱名の、聲は此  
 世の別れかと、身をもむ妻を動かさず、膝に引敷強氣の手負、義晴  
 いざと潔き、勇者の最期あへなくも首は前にぞ落にけり、わつと計り  
 に柵は、其儘死がいにいたき付聲も惜まらず泣叫ぶ、心を察し諸袖を  
 じぼるも血脈恩愛の涙にかはりなかりける、義晴は涙を拂ひ飼サテ  
 殊、歎いて返らぬ松田が最期、遺言守るは音壽が身の上又此首はろ  
 は持歸り、佛事もよきにと詞の中、麓の方にゑいゝ聲、ひいさな  
 びける兩陣の、入亂れたる関の聲身にぞこたゆる柵が涙ながらに亡  
 夫の、まろしの笠上帯に、包ひも涙雨やさめ、ふり行末の末迄も、  
 思ひ、つゞけし敵味方、兄の忠臣妹が、真心くもり泣くも麓の方  
 へ「たどり行、短夜の、風吹拂ふ庭の面隈なき月も哀をへ、涙の露

かいたいけに、無漸なるかや稚子の、目は泣はらし、袖摺の、其松が枝に、からまるゝ、妻の眞弓はさし寄て、詞、利休殿尤武智光秀といふ逆賊の子とは云ひながら、我子の爲にはお主の若殿、手にかげふとは胴欲な、とふぞお命助ける様、思案仕かへて下さりませといへ共、更にこたへなく、れのが好める薄茶の手前、稚子は座をしまて、詞おりや侍の子じやによつて何ともない、早ふ殺して下されど、云放したる健氣さを、聞に眞弓はたへ兼て、詞、追は武士の育から、聞分けよい程なほ不便な、こいぢらしうはござらぬか敵と味方と分登る道は二つにかはれ共、同じ雲井に、照月の分隔なき恩愛と、情の道を辨へてごうぞ命を助るやう、思案してたべ我夫と、詞を盡し理をせめて涙ながらに泣詫る山手は修羅の責鼓時しも遙に衍して、松田太郎左衛門政道を森尾義晴討取りと、聞より思はず

つくと立、倅宗太郎は早討死を遂しとか此上は生け置て詮なき音壽、此世の暇取らせんと、ほごくいましめ悦んで手をふりする有様を、見るに心は弱れ共、四海の怨敵根を断て枯す枝葉と振放すのふいたはしやとさゝゆる眞弓、寄るを寄せじと引戻し争ふ折も柵が、脊に夫の切首を結ぶ妹脊の別れ道、脛もあらはにかけ戻り、此体見るより稚子を後に圍ひ、待てと、言せも立てず聲荒らげ、詞、此期に及び聞く事ない、倅討死せし上は天王山を取切られ、光秀が敗軍も目下妨げせずとそこ退けど、尖さ刀振りかざす、其手に取付き聲震はし、詞、コレ親父殿、慈悲も情も辨へながら初て逢た嫁の思はく、生としいける身でいなし、先立老木若木の蒼どうぞ助けて進せと、涙に誠姑が、情の詞身におまり有がた涙柵が、夫の首を抱き上げなさら我夫も諸共に命のお詫とさし付られ、追剛氣の利休も、親子の

輪廻に引されて、たるむ心を取直し、じり、じりと付廻す、地獄の  
呵嘖三惡道、面倒など突退蹴退、エとい一聲稚首水もたまらず打落  
せば、二人はわつと泣倒れ正体もなく伏沈む、詞主殺しの大罪報ひ  
も早き此死さま、いで久吉の本陣へと、かけ出す裾をと、ひる嫁、  
はつたと蹴飛ばしかけ行向ふへあまたの軍卒、高挑灯に威風をてらし、  
まづ入り来る眞柴久吉、あたり輝く陣裝束、思ひ寄らねば宗左  
衛門遙、しどつて平伏し、ヨ、存じ寄らざる公の御入來、只今陣所へ  
推參の所、願ふてもなき對顔と、敬ひ深く相述べれば、久吉莞爾と打  
笑て、詞逆賊光秀が一子音壽丸、足下扶助致さる由、家臣森尾が密  
事の注進、急ぎ討手と申も餘り仰々敷、久吉密に向ふたり、いかに  
と嚴然たる、詞に猶も恐れ入、詞、計らず手に入る武智が倅、  
討取たるは某が信義を忘れぬ兼ての交り、イヤ御改下さるべしと、血

沙を清めさし出せば、久吉とつくと實檢有り、詞父光秀も此如く、  
やがて討取主君の怨敵、とは云ふ物の稚き者、不便の最期遂たるよ  
な、イヤ宗左衛門、云ば小兒の此切首、梟木にさらすよも及ぶまじ、  
由縁の方へ葬り召され、御邊への恩賞は、風雅を好める別業へ、思  
ひ寄つたる寸志の一品、それ、者共早是へと、仰の下に雜兵共、庭  
にぎつさり一つの居石、詞何と宗左見られしか、亡君春長公の御自  
服ども思されて、お請有らば拙者が悦び、スリヤ其石を某へ、いかにも  
小袖がはりの小袖石、菖蒲にも、あらぬ眞孤を引かけし、かりの淀  
の、忘れぬかな、チ、さらば、と一禮し、從者引連れ久吉は本  
陣さして歸らる、跡見送つて宗左衛門はつと吐息も突詰し女心の  
柵は何思ひけん表の方、駈出す戸口立て切利休、待て女、詞音壽丸  
が身代りに二人が中の倅を殺し、夫が最期の忠義も立、嘸本望で有

ふなど、聞て憫り、嗣ついでそんなら此子を初から、あなたの子といふ事を、十六年が其間、對面せざる我倅、たどへ幾年経る逆も、骨肉分けし此親が、見忘れてよい物か、音壽丸に出立せ、連來りし稚子の、面ざし目元鼻筋迄、倅に其儘生寫し、其時孫とは、知たるをや、とは言ながら、現在の祖父が手にかけて一刀の、下に消行不便さを、こらゆる心の四苦八苦、コリヤ、推量せよと大聲上げ、取亂したる溜涙、ねふれるごとき死首を、右と左りに打守り、嗣ついで倅、久々にてよく來たな、十六年が夢の内、忠孝全き親子が最期、出かしておつたと一言が、夫子の爲の經陀羅尼と、有がた涙棚が、袖に露置くかこち言ろうしたああなたのお心と、さらにで恨みし不幸の罪、お赦しなされて下さりませ、其訖言は此の母が言ねばならぬ此場の時宜、孫と我子の死ぬるのを、夫と白髮の身の因果、むでい者じやとさげしんで、た

もるなやいのと、姑が、詫るも涙聞く涙、嗣ついで勿体ない事かつしやつて下さりますな、嫁と名ばかり是迄に、お宮仕へもする事か、逆様事を見せまする、不孝の罪が恐ろしい、とはいふ物のあぢさない、二世と契りし我夫の、最期の場所に居あがらもとめる事さへ情ない、いと可愛の千石迄人も多いに祖父様のお手にかけてふと親の身で連て來とは何事ぞと、歎けば道利休も、恩愛死別のうき涙二つの首を見つ見せつ、取り亂したる三人が、涙の雨に水かさのいと増りて淀川の、堤も崩るゝごとくなり、利休漸涙をおさへ、嗣倅が忠義を立てさせんと信義を失ふ我計ひ、天地を見抜く久吉殿、賜も有べきに、小袖にかへて遣はずと心得ぬ庭の居石、其上猶も不審なるは、金葉集に乘せられし相摸が詠歌、菖蒲にも、あらぬ眞菰を引かけしと、引きぞ煩ふ頼政が深意を取れば千石が、最期を花によそへし謎、

俸が小袖千石と、心を込めし我への賜、今こそ思ひ當つたりと悟るも、追久吉の、名智を感ずる計なり、柵は膝すり寄、詞「スリヤ」身がはりと、いふ事を、そんなら孫の千石が、身代りに立たのも、水の泡になり、ますかいのふ、ヤ、愚く、敵を恵む寛仁大度、猶も願ひを立んと思は、此利休が雛腹一つ、必ず留など指添を、既に扱かんとする所、取付き歎きといむる二人、放せくと争ひの、折もころ有れ一間より、詞「ヤ」松田宗左衛門利休殿、狼狽ての犬死あるか早まられなと聲をかけ、障子をさつと眞柴久吉まづくと立出れば、思ひ寄らねと騒がぬ利休、詞「ヤ」犬死とは事おかしや、誠眞の失せし某が既に報ふ此切腹、ホ、追は老体斯も有んと察せし故、陣所へ歸る体に見せ、とくより忍び窺ひ聞く、西國の探題たる眞柴久吉、實檢遂し光秀が一子、天地廣しといへ共今一人と有るべきか主君を弑せし武智光秀、

夫に引かへ子息政道、討死、遂しは、適勇者、せめては死したる人との菩提の爲めに此所へ、庵を結び利休殿、詞「好める道の茶を以て往來の人に施さば、死ぬるに増さる節義ならんと情の一句は則悟道、死をといまりて松田利休、詞「ハ、惠も厚き御仰、教への心は則菩提心の濁り墨染の衣がはりの、此居士衣、くもりを拂ふ誓ひぞと誓ふつと押し切て、詞「姿心もかはる世に我は茶道の道廣く、孫が其名の一字を取、利休を其儘に千の利休と改名し、浮世の塵に交はる共只本覺の佛性たらん、詞「ホ、天性備はる千の利休、今よりは久吉が則ち茶道の師と頼まんと、約束堅き小袖石、庭に哀は稚子の、涙の種か袖すり松古跡となりて末の代に、残る其名の因縁は、此時よりとしられたり、かゝる折しも眞柴の郎等、庭上に大息つき、御注進と呼はれば、堀本義太夫、味方の勝利は何とく、仰の如く備を立、

兩陣互に鎬を削り、爰をせんごゝ戦ふ中、敵の勇將壁江才藏、陣頭に踊り出、詞味方の諸軍を手玉の如く打付け、投付け駈廻る、其勢ひにおぢ恐れ、少したゆみて見へたる所に、詞福島の陣中より、至て小兵の桂市兵衛、斯と見るより飛かゝり、互に組合金剛力者、六尺ゆたかの才藏を難なく生捕古今の手柄、勝色見する間もなく、川を隔し筒井順慶、時分はよしと光秀が陣所を目がけて無二無三、一手に成て責かくれば、敵は廢忙狼狽騒ぎ、崩れ立たる其虚に乗て、追立はつ詰責付れば、是迄也と光秀も馬を飛して只一騎、小栗栖さして落延しと追かけ行味方の勝利、御歸陣有て然るべしと、悦び第み訴ふれば、詞ヲ、潔しく、小栗栖へ後詰せん、旁用意と久吉の、詞にはつと迎ひの軍兵いざ御歸陣と引居る、駒にゆらりと法の縁、結ぶ一世と二世の縁、切て捨たる亡魂の、しるしを直に野邊送

り、又思ひ出ず、女氣に涙の袖や鎧の袖、旭に映じさくら〜、綺羅一天に菊取る眞柴、仁徳なりや風雅の徳、忠孝全き其徳を世々に、傳へて「美嘆せり

繪本太功記

○六月十三の段

神力勇者に勝すといへ共、天途に是を討す、されば武智十兵衛光秀  
筒井順慶裏切によつて山崎の一戦敗れ、漸遁れ小栗栖の藪陰近くさ  
しかれば、追々駆くる眞柴方、落人よ遁すまとおめき叫んで切  
かれば、闘ぢちよこ才あうち虫共、冥途の導きしてくれんと、振  
かざしたる刀の稻妻瞬く内に先手の軍兵、十二三騎切て落せし勇猛  
力、叶はぬ赦せと一同に、嵐にさうふ端武者共、むらくばつと、  
逃失たり、相人なければ光秀は太刀のいきりをさまさんと、藪の小  
かけに手綱をひかへ、傾く運の口惜涙、鎧の袖にはらく、降  
かゝりたる夕立の空も哀や添口らん折ふし藪のこなたより、たゆみ

今いま光秀みつひでが鎧よろいの透間すきまを見極みまはめて、ぐつと突込つきた猪突ぶた鎗やり驚おどさながら切拂きりば  
 ふ、間まもなく突出つきたす竹鎗たけやりの穂先ほのすゑは風のまの薄うす、ちぎ立突たち立切たち拂ばひ暫しば  
 し時ときをぞ「うつしける、梢えぐさにすたく蟬せみの經きり、手向てむけとありし武智ぶち光秀みつひで、  
 小手定こてままらぬ竹鎗たけやりを、身の毛けのごとく刺通さしとほされ、流ながる、血汐ちしほに夏草なつくさ  
 を花はなと染そめなす紅くれないひの、田畑たはたのせ道刀みちやいばを杖つゑ、よるぼひよるぼふ無慚むぜんの  
 有様ありさま、はつと一息いついき撞出つきたす鐘かね、寂滅じやくめつ爲樂ためら責せ太鼓たいこ、修羅しゆらの迎むかひの百姓ひやくしやう共ども、  
 集あつまり寄よたる一ひとひら雀すずめ、又また突つかゝる上段じやうだん下段げだん、一世せの瀬戸せとと受流うけながし、  
 爰こゝを、せんど、切きふせぐ、手練しゆれんの鋒先はまさき百姓ひやくしやう共ども、叶かなはぬ赦ゆるせと我先われ先に跡あと  
 をも見みずして逃散にげちたり、遁のがさじ物ものとかけ出し、心こゝろは矢猛やたけとはやれ共ども  
 身体しんたい勞いたれどつかと座まし、拳こぶし貫つらぬく無念むねんの齒はがみ弱よわる心こゝろを取直とりのなほし、詞ことば一ひと  
 元げんに歸かへす此世このよの暇いとま、刀逆手やまてに我腹わがはらへがばと突立つきたて引廻ひまはす、程ほどあく來きた  
 る眞柴まぢ久吉ひさきち、万里ばんりに羽はうつ大鵬たいほうの威勢ゐせいは旭あさひの登のぼるが如ごとく、優い然ぜんと

歩あゆみ寄よ、詞ことばいかに光秀みつひで主しゆを討うたる天罰てんばつの報むくを思知おもひたるかと、太刀たち拔ぬ  
 放はなし光秀みつひでが首くびをはつしと打落うちおし諸軍しよぐんに向むかひ聲高こゑたかく、詞ことばヤ、者共ものども、此  
 虚きに乗のて敵てきの殘黨ざんたう左馬助さまのすけ光俊みつとし、齋藤さいとう内藏ないざう助すけが備そなへを暫時せんじに攻崩せめつし、  
 名なに近江路みづかみの湖みづうみへ一騎ひとも殘のこらず追沈おひしづめん旁來かたやうれと先に立たち、勇ゆうみ進まん  
 で凱歌がいがの聲こゑ、箴せんをたゝき凱陣がいじんの其悦そのえびを今爰いまこゝに、うつすも勸善懲惡くわんぜんてうあく  
 の端はしどもおれとまよさな言書ことばを納なめたる君きみが代しろの、万まく歳さいの壽ことばは中  
 と申まをもおろかなれ

寛政十一年 未 七月十二日作



明治二十七年三月一日印刷  
明治二十七年三月十六日發行



發行所

東京市日本橋區通リ四丁目七番地

西村寅次郎

印刷者

東京市芝區田村町八番地

潮來彦右衛門

發行所

東京市日本橋區通リ四丁目七番地

東雲堂

全

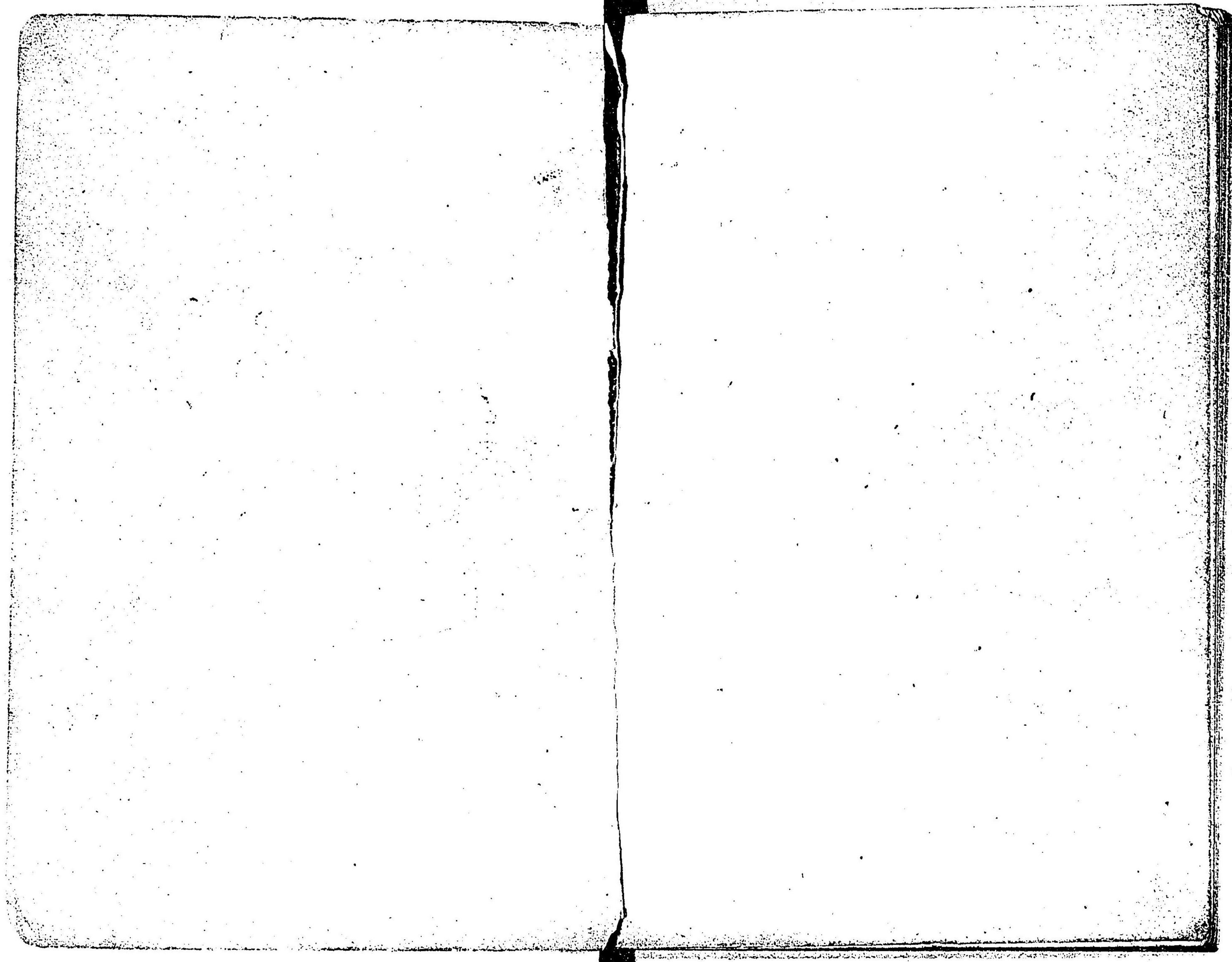
愛知縣名古屋市本町通六丁目

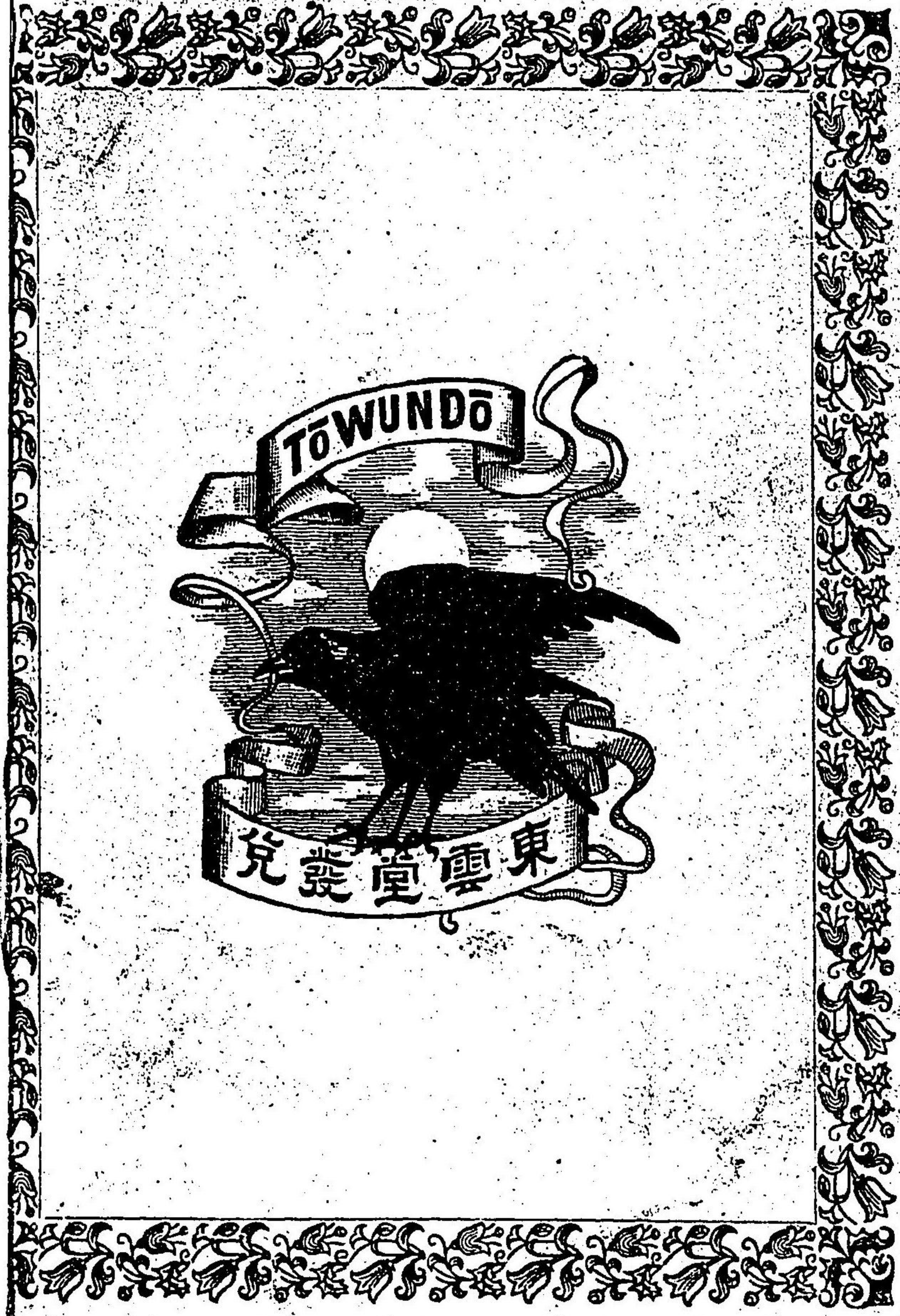
東雲堂

全

大阪市東區本町四丁目

東雲堂





TOWUNDO

東雲堂兌